
いつかは、羽ばたけるものだ、信じていた。

まめ太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつかは、羽ばたけるものだ、と、信じていた。

【Nコード】

N8207U

【作者名】

まめ太

【あらすじ】

<あらすじ実験開始>

「そりゃー、このゲームやって長いからねー。ゴーレムの基礎体力がナンボで、どの攻撃をどれだけ当てりゃ、どれだけ減ってってのは、計算出来るでしょー。」

シヨタな廃人がへらへらと笑いながらそう言った。

そんなのー々計算しながら戦闘なんて出来ねーよ、と冬夜は苦笑する。

高速移動が出来るサブマスの速度なら、このダンジョンが20分

で一周、移動スキルのない冬夜たちは30分かかる。サブマスはエネミーを掃除しながら、冬夜たちはただのマラソン、でこの差だ。魔法使いの彼にかかれば、部屋全体を攻撃する殲滅魔法の一撃で雑魚部屋など即座に片付く。魔法回復薬のガブ飲みを併用しての無双。

現在3周目、あと30分で解散の時刻だった為、巻いている。

巻く、とは攻略スピードを上げること、つまり、こまけえことはいいんだよ、という意味だ。

ほぼチート無双状態だった。

ぶろろーぐ

ようやくの事で手に入れた機械を両手に抱え、少年……冬夜は興奮も冷め遣らぬという状態だった。包み紙が散乱し、包装パッケージが部屋の隅に転がる。制服のブレザーも脱がないままの彼は居間のフロアに座り込んで、新しいゲーム機のハードと格闘中だった。楕円形の本体部分がメタリックな黒い輝きを反射している。かなり大きな機械だ。

一年にも及ぶアルバイト期間。それでもまだまだ足りないところを、思いがけず両親からの援助があった。今、巷で大流行のVRMMOをプレイする為に必要な機材の購入費。あんまり必死になっているから少し助けてやろう、誕生日の前払いだ、と父親は笑った。

100万にも近い金額。よく母親が許してくれたと思っていたら、バーチャルショッピング街とかいう新手のサービスが参入してきたのだという話だった。学校に行ってる間は貸してね、とちゃっかりした母親も父親同様に機嫌が良い。最近、勉強にも力を入れていたその努力が報われたらしい。

『ちよつとくらいなら助けてもらえるかなー、とか思ってた頑張っただけなんだけど……やった、勉強してよかった!』

冬夜は片腕のみの小さいガッツポーズを決める。

恐らく、学校の友人たちの誰よりも抜きん出たはずだ。機材は高価で、そう簡単に入手出来るシロモノではない。学生などには到底手が届くはずなどなかった。一般の社会人ですら、ローンで買うほどだ。だから、宣伝では景気の良い言葉を並べているが、実際は金持ちのオモチャ、という位置付けに過ぎない。現状のところは。冬夜の学校は上流家庭の子弟が多い、彼の家もご他聞に漏れず金持ちだった。

ライバル社が追いついてきたら生産コストを下げて、次世代機とかいう名目で廉価品が出てくるのだろう、お決まりの話だ。

「一日二時間だけよ、約束ね。」

母親に釘を刺される。高価な機材という事もあり、自室への持込は禁止だ。それでも、誰よりも早い参入という魅力は褪せたりしない。

セッティングが終了し、オープニングが始まる。この最初のイベントが終了すれば、プレイヤーとしてバーチャルの新しい世界に降り立つことが出来る。チュートリアルの説明が終了し、アナウンスに従って冬夜はゆっくりと目を開けた。

足元の草を風が吹き流してゆく。抜けるような青い空。行き交う飛行船、乗用の竜。空の遥かな高みには小さく太陽が煌いていた。前面に広がるパノラマ、山々の連なりが遠くで霞む。目前には巨大な滝が足元の崖下の、けぶる水飛沫の雲に落ちてゆく。広大な、大自然。

後ろを振り返った。

そこに、始まりの村がある。この世界へ降り立ったプレイヤーがまず真っ先に立ち寄るべき場所。

大瀑布を背景に、ごつごつとした岩棚があり、簡素な階段が設けられている。階段を降りてゆくと、ベネツィア辺りの白亜の壁に囲まれた集落に辿り着いた。白い壁と赤や橙の屋根はやっぱりファンタジー世界だ。入り口付近に佇むNPCに近付くと、「お、新入りか。」自動的に喋り始める。

「ここをまっすぐ行けば村に出る。慌てて村から出るんじゃないぞ、最近はそのつかしいのが多いんだが、まずはじっくり村を歩いてみてくれよ。」そう言って、また勝手に手を振って追い立てた。

冬夜はまず、自身の姿を確認した。設定画面で嫌というほど見てはいたが、やはりゲーム内に降り立ったら真っ先に見たいと思うものだ。自身が映る暗闇で、念じるだけで背が伸び筋肉が付き、彫り

が深くなり鼻が高くなった。今度は明るい場所で、この容姿を見てみたい。

村に入っすぐの場所にギルド受付所と書かれた看板が掲げられている建物があり、その玄関先には大きな姿見の鏡が設置されている。誰も考えることは同じなのだと言げるように。

先客が数名いる中へ、冬夜も紛れ込んでいった。

青い目をした外人が鏡に映っている。髪の色は黒にしたが、本当に真っ黒だ。設定年齢は20歳にしてある。3歳ほどサバを読んだ鏡の中の青年は、本来の冬夜の顔を少しばかり整形したような顔をして、二割増程度にはハンサムになっていた。右手で顎を支え、じつくりとこちらでの顔を堪能する。ふと周囲を見れば、集まっていた連中はすでに居なくなつて冬夜一人が取り残されていた。

声をかける予定だったのに、出鼻を挫かれた格好だ。

不機嫌な顔をして、冬夜は受付所から離れた。ここにはまだ用がない。ここは、仲間と共にギルドを作ったという連中にしか用事がない場所だ。まずは村長の家へ向かい、初心者用のチュートリアル・クエストを受けるのが通常のコースだった。

最初のうちは、ソロで遊べる類のイベントやクエストが沢山ある。徐々に世界に慣れ、知り合いも増えてくれば、パーティで受けることの出来る難易度の高いクエストも受注できるようになる。

降り立ったばかりの初心者、村長に話しかけることでようやく、『駆け出しの冒険者』という、最初の肩書きと、準備金という名目の資金を手に入れることが出来た。今は初心者の衣装。なんの飾り気もない、NPCの村人と代わり映えのしない服装だった。資金をどう使うかはプレイヤーの意思に任されている。普通は衣装を替え、装備を充実させるものだが、冬夜には別の考えがあった。

他のプレイヤーを襲つて、奪う。

だから、装備を買って準備するつもりなど毛頭なかった。

ぶれいやーきる

プレイヤーキル、ゲームを遊ぶプレイヤー同士での殺し合いのことだ。プレイヤー・バーサス・プレイヤーと呼ばれる対戦形式ではなく、文字通りの追い剥ぎ行為を指す。先駆者的なタイトルや代表格といえる大手のタイトルではほぼ禁止されている行為が、このゲーム世界では許されていた。

シナリオと呼べるものも充実していない二番手三番手のタイトルでは、すぐにレベルがカンストしてしまい、ユーザを繋ぎ止める手段がない。大手とは違う魅力を打ち出す必要がある為に、多くが禁止手とするPKを推奨するタイトルもあるのだ。従って、集まってくるプレイヤーも最初からそのつもりの者が多い。

下調べは十分にしている。迂闊にこの村を出れば、途端に「若葉狩り」という初心者を専門に狙う連中の餌食になる事も、レベルが低いうちは慌てて装備を揃えても無駄になるという事も。

バーチャルの世界といえど、人を殺すという行為は背徳の悦楽なのだろう、モンスターを狩るよりも人狩りを主目的とするプレイヤーも多い。そういう連中やモンスターなどに襲われてHPがゼロになれば、その場から消える。装備や持ち物を、すべてその場所の大地へとぶちまけて。

相手がモンスターならまだマシだ、急いで戻れば自身の持ち物は無事に拾えるかも知れない。だが、プレイヤーに殺されたなら、多くは根こそぎ持っていかれてしまうだろう、どこかで売り払われるのだ。

そういう事情により、高価な装備などは、それ相応の強さに至った者にしか纏うことが許されない。レベルではなく、実戦経験値でいう『強者』にしか、守りきることは難しかったし、時には『強者』ですら、誰かに殺されて装備を奪われた。

『さて、これからどうしようか……』

冬夜が思案するうちに、村の役所へと男が走りこんでいった。P
Kで殺されたのだ、パンツ一丁であれば犠牲者と見ていい。どうやら初心者ではないようだ、彼の形相は憤怒のあまり真っ赤に染まっていた。追い剥ぎ上等の世界では、銀行に全ての財産を預けておくものだ、彼もまた予備の装備を取りに行ったのだろう。この近辺に居たという事は、おそらくは若葉狩りの一人。しかし、若葉狩りを返り討ちにする事に喜びを感じる上級プレイヤーというものが存在しており、そういう者たちは若葉狩りの連中よりさらに始末が悪い。初心者衣装を着て、初心者を名乗り、そうして攻撃力の低い初心者用の武器で、文字通り鬺り殺すのだ。その為に、このゲームの初心者用武器の攻撃力が高めに設定し直されたという曰くまである。

リベンジの準備を終えたさきほどの男が役所から出てきた。

ロクでもない世界へようこそ、すれ違い際、目が合ったその男は冬夜にニヤリと笑いかけた。

ここの銀行は役所が兼ねているらしい、見当をつけてから冬夜は歩き出す。男に対しては、同種のだくだい笑みを返しておいた。

男に習い、役所の門戸をくぐる。待ち構えるNPCの前へ立つだけで、機械的にイベントが始まった。

「ようこそ、ウィルスナの地へ。ここは始まりの村、貴方の来訪を心より歓迎いたします。」

美しい容姿の娘がにこやかな笑顔を貼り付けてそう言った。手には金貨の入った皮袋を捧げ持つ。今さら聞くべき事など何も無い、金だけ受け取り冬夜は役所を出てゆく。また一人、入れ違いで入った誰かが同じ台詞を言われている。大手のゲームほどではないが、賑わっているようだ。

役所の隣に小高い丘があり、大きな木が植わっている。その木の傍に少し他とは趣の違う家屋が建っており、入り口のドアが開放さ

れている。ここが、村長の家だ。その建物の向こうには墓地が広がり、墓石の合間を縫うように移動する大蜘蛛の姿が見えた。初心者向けの弱いモンスターだ。墓地のさらに奥へと目を向ければ鬱蒼とした雰囲気を醸し出す古い洋館が見える。しばらくの間は、あの洋館が冬夜のフィールドワークの場所となるだろう。初心者が一番最初に向かうダンジョンだ。

まずは村長に会わねばならない、金を貰った後には村長からのクエストが自動で発生する。

屋敷の門戸をくぐる、基本、村の建物のドアはすべて開け放たれていて、出入りが自由だ。中に、村長と思しきNPCが待っていた。「おお、よく来てくれた。君を呼んだのは他でもない、墓地に棲み付いた大蜘蛛を退治して貰うためなのだ。どうか引き受けて欲しい。」

冬夜の顔などまるで見もしないまま、村長は喋る。冬夜が部屋の中をうろつき廻っているからだが。

勝手に部屋を物色している間にも、村長の言葉は続いている。

「ここに武器を用意した。大した代物ではないが、役に立つと思う。引き受けてくれるのなら、受け取ってくれ。」

どこから湧き出したものか、NPCの手にはブレードソードが捧げ持たれている。

これを受け取ることが、「Yes」の意味になりイベントが勝手に始まるのだ。同時に胸ポケットの辺りからメロディが流れた。ごく小さな音で、ごくごく短い。ポケットを探ると、これもまたいつの間に入ってきたのか、金属製のカードケースが紛れている。蓋を開けると、うつすらと輝く透明なカードが入っていて文字が浮き出して見えた。これは例え捨てても失くす事のないカード、ステータス・カードだ。称号の欄には『駆け出し冒険者』と書かれていた。

たーげっと

冬夜がこのゲームを始めて、一ヶ月が過ぎた頃。

既に村にある初心者用ダンジョンではレベルが上がらなくなっていたが、それでも辛抱強くソロでのダンジョン攻略をひたすら繰り返して、上げられるだけ上げたレベルがようやく12になる頃という頃に、一人のプレイヤーと出会った。

他にも多くのプレイヤーと出会ってはいたが、彼らは友達であっても味方ではない。安全な村のフィールドを一步出れば、平気で襲い掛かって来たり、こちらも平然と迎え撃った。そういう世界だから。

不可侵を結ぶことが出来るプレイヤーは同じギルドに所属しているという条件が必要だったし、多くのギルドは入るための条件を設けている。レベルがカンストしていること、などという無茶振りも多い。だから多くは最初の村に居座って、気の合う仲間を揃えてから自分たちでギルドを作り、自分たちの身を守った。ギルドは二人居れば作ることが出来たが、冬夜と、初めて出来た「相棒」はギルドを作らなかった。

冬夜の相棒となったプレイヤーは、アキラという名前だった。白銀に輝く高価な鎧を所持しているが、もちろん普段は銀行に預けっぱなしだ。今も初期服に毛が生えた程度の簡単なワンピースを着ている。そして、ハードランスという物騒で巨大な武器を背負っていた。装備と云えそうな物はランスと両手に嵌めた鉄製のガントレットくらいだ。ワンピースはいわゆるメイド服という代物で、村の商店では一番安い。ニーソックスに黒い靴も一番安い品。しかし、狙っているとは思えないラインナップで、一部では好評だった。冬夜と同じ黒い髪はストレートのセミロング、おかっぱのような髪型に飾りっ気はない。大きな黒い瞳で肌が白く、まるで日本人形のよ

う。そして小さな唇はたいていの場合には閉じていた。

冬夜は相変わらずの初期服だ。誰も盗っていかない。武器だけはブレードソードからアーチェリーに変わっていた。弓のほうがい勝手が良かったのだ。

「前から時々見かけたけどさ、なんか雰囲気変わってね？」

「ん。中身が変わったからじゃねえ？」

冬夜の質問に、美少女キャラは可愛らしい声でそう返した。

さらりと受け流される言葉に、冬夜も苦笑で答えるしかない。喋ってみれば、ネカマという奴だったようで、見た目とのギャップで少し残念な思いだ。淡い期待は見事に砕けた。

以前は、どことなくいい好きでないキャラに見えたので世間話をする程度だったが、最近急に人格が変わったようにいい奴になった。そこで、思い切ってこちらから近付いてみたのだ。

中身が変わったりするのはよくある話だ。ある程度育ててからオークションで売るという事が普通に許されていたし、アカウント・ハッキングはシステムの複雑さの関係から、とてつもなく難しい。しかし、機器さえあれば出来るこの手の商売は逆に盛んになっていた。彼もオークションで買ったのだらう。

「今日はどうする？」

美少女が聞き返す。

「ダンジョンも飽きたしなあ、……狙ってみるか？ そろそろ。」

冬夜の悪い笑みに、釣られたようにアキラも笑い返す。美少女の悪巧みな表情というのはまた、格別だ。

二人のレベルでは、せいぜい、迂闊に出てきた初心者パーティか、同レベルのソコを狙うくらいが関の山だ。PKでも相手のレベルに応じた経験値は貰えるから、ここは積極的に行きたいところだった。『モラル？ それって何処の特産品ですか？ 美味しいですか？』

ニヤニヤと、身を隠した茂みの中からターゲットに狙いを定め、

冬夜は合図を待っている。飛び降りるに都合良く、狙うに都合のいい具合に枝を茂らせた中低木が、フィールドには至る所に生えている。運営の配慮にGJだ。

二人が狙ったのは、ソロの男性プレイヤーキャラクターだった。中身はどうやら女性のようだが、そんな事は知ったことでない。知人か何かは知らないが、少しばかり名の知れたギルドに在籍し、最近は村から離れたフィールドでレベル上げをしている様子だった。こういう後ろ盾のあるプレイヤーは、通常、若葉狩りには狙われない。報復がなにより怖い上に、いつ助っ人が飛び込んでくるかも知れないからだ。けれど、逆に言うなら、これほど狙い目の得物もまた居なかった。二人の論理に掛かれば、の話だが。

「馬鹿だねー、隙だらけじゃん。」

じつと木の上で息をひそめ、がら空き状態の無防備な背中に標準を合わせ続けている。どうせ助っ人を呼ぶだろう、何度か話をした事のあるあのギルドのマスターは、この時間ならいつでも居る。すっ飛んで来るに違いない。

『でも、意味ないしな。俺とアキラと一撃づつ、二打で決めてやるよ。』

その後でマスタークラスの強者に殺されても、首尾としては上出来だ。こちらの経験値は減らないし、盗られて困るような物は最初から持っていない。さらにアキラの理論は、冬夜の上を行った。上級プレイヤーと戦えば、例え瞬殺されたとしても良い経験になる。本気で掛かる事の少ない最強クラスと、ガチで戦える機会は滅多にないから、と。

『マジ、戦闘種族だな、アイツ。』

苦笑を洩らす。と、別の茂みからアキラが突撃を仕掛ける姿を見た。

一気に引き絞る弓手。アキラと出会ってから、短時間のうちに狙撃手になった。視線の先には人間の背中があり、視界の隅に映る鋭

利な楔の先とを直線で結んでいる。映像が微妙にブレるのは仕様だ、ピントが合った瞬間が、すなわちクリティカル距離という事だから。冬夜の視界がクリアにターゲットを映した瞬間、指先が動く。限界にまで絞られた弦が一瞬で矢を撃ち出した。

驚き、狼狽えるターゲットの背中に、会心の一撃が襲い掛かる。タイミングはぴったりだった、減算なしの最大攻撃力が上乘せされた一筋の軌跡。ターゲットが仰け反る、その腹にアキラが渾身のタツクルでランスをぶち込んだ。

ほうふく

プレイヤーキャラは、装備の一切をその場に残して消えてしまった。けれどアキラは油断なく身構えたまま周囲を窺っている。狙撃手の冬夜が隠れていた樹木から飛び降りて、合流する。二人とも緊張の面持ちでいるのは、新たな敵の出現に備えてのことだ。現在は、襲った相手の消えた場所から少しだけ離れた所にいる。木々の茂みに隠れた敵の狙撃を警戒し、射程内から外れた為だ。どちらとなしに、喉を鳴らす。唾液を嚥下した。

最悪、テスト版から居るといふ有名な騎士に戦闘の手ほどきを受ける嵌めに陥る。

二対複数の戦いに備え、死角が多くなる茂みから離れている。狙撃手は通常樹上から降りないものだろうが、なにぶんこちらは二人きりだ、敵の数を把握出来ない場所に展開されるのは拙い。森を背景に、開けた草原で迎撃体勢を整える。

心臓の音を聞きながら、冬夜はアーチェリーを即座に撃ち出せるように構え、周囲に視線を配っていた。相棒であるアキラとはちやうど互いの背中を預ける格好。彼女も無言で耳をそばだてている。

「……どうやら、来ない、みたいだな。」

「連絡する間もなかったかな。」

ようやく緊張を解き、身構えた武器を下ろす。ギルド間の通信網を使用されていたなら、すぐに誰かが駆けつけるものだ。先ほどのプレイヤーは、一瞬の出来事の為す術もなかったという事だ。

「よしっ、そうとなれば貰うモン貰ってズラかうぜ！」

冬夜が声を上げた時には、すでにアキラが一足お先と現場へ戻っている。我先にという慌てぶりで地面に散らばるアイテム類をかき集めていた。

「き、汚ねえ！」

慌てて走り寄り、アキラが手を伸ばしていた木製の盾を横合いか

ら奪う。この時ばかりは仲間でも遠慮無しに醜い奪い合いを繰り広げる。いつリベンジであるのプレイヤーが戻ってくるかも解からず、また助っ人など呼ばれていたなら危険度が跳ね上がる。一刻も早く、この場を離れるべきなのだ。

「よしつ、目ぼしいモンは盗った！ 逃げるぞ！」

自身やアキラの装備から、PK狩りの上級者と勘違いしてくれた可能性もあるにはあるが、ぐずぐずしていて良い事など何一つないから、二人は慌ててその場を後にした。

初めての連携狩りは巧くいった。カードを確かめると、冬夜はLV13になっている。

チヨロイな、と思っていた。この時は。

村へ戻ると、例の騎士に待ち伏せをされていた。さっき殺したプレイヤーの所属する、ギルドのマスター。

騎士職専用の白銀の鎧を身に纏い、魔法剣を差している。うつすらと輝く幾何学模様はルーン文字だという設定で、通常店売りの武器よりもグレードは高い。兜の中の表情は見えないが、周囲の空気はすこぶる威圧的に感じられた。

「やべえ、怒ってんじゃないか？」

「うわ、なんか不気味。」

ひそひそと二人で話しつつ、その横を通り過ぎようとした。が。

「おい、待て。」

やつぱり、という表情で、二人は振り返る。まさか中立地帯のこの村で、仕掛けたりはしないだろうが、あまり良い予感はない。騎士の纏う白銀の鎧は、いつだったかアキラが銀行内で見せてくれた物と同じシリーズだ。高額の課金アイテム。普段から着ているというだけで、どれほどの実力者かが知れる。

「お前等がさつき襲った奴の持ち物、返してやってくれんか？」

単刀直入に、ギルドマスターが言う。金なら払うから、と。警戒の面持ちを崩さぬ二人に、騎士は取引を持ちかける。NPCの店に

売られてしまうと、そのアイテムは何であれ二度と戻ってこない。
何か大事な思い出の品でも紛れていたのかも知れない。自分達で確認した時には、高価な物などなかったと思うが。

「尻拭い、大変だね。」

アキラは一言多い、騎士に睨まれて竦みあがる。その隣で冬夜も思わず身を縮めた。

ゲームを始めた序盤のうちから、こんな大物の相手をするなど、二人の予定にはなかったのだ。

レベルの高さのみではない、人格的な威圧感がこのギルマスからは感じられる。VRとそれまでのMMOとの大きな違いは、等身大の人間そのものと向き合わねばならない事であった。いくらメイキングで小細工を加えても、滲み出るものは変えられない。

「お前等、ギルドに加盟してないんだな。悪いことは言わんから、どうか入ったほうがいいぞ。一匹狼を気取れるほど、ここの世界は甘くないからな。」

「ソロなんてやってないよ、ちゃんと相棒がいるもん。」

どこまでも挑発的なアキラの目を、真っ向から捉えて騎士は鼻で笑った。

「まー、こつちもやりたかないが、尻拭いがお仕事なんだな。……悪く思うなよ。」

取引は成立。しかし、金の詰まった皮袋を渡しながら騎士が告げた言葉の意味を、この時の二人はまだ理解していなかった。

騎士がその場で受け渡しを求めたアイテムは、ミスリルのナイフ一本だ。それなりに高価だが、ゲーム内通貨で買える。売り払う予定だった品だ。

「仲間に貰ったんだそうだ、ソイツだけは返してくれってさ。……大事なモンは持ち歩くなつて言つといたんだがなあ。」

自身の指導が悪かったせいだ、と、その表情に書いてあるようで、冬夜は少しばかり気恥ずかしい思いをした。良心の呵責とまでは行かなくとも、なんとなく、むず痒い。

「残りの荷物は適当に郵送しといてくれ、着払いでいいから。」

このゲームには郵便システムがあり、アイテムの受け渡しが出来ようになっている。行商システムから派生したものだ。手に入れたアイテムはNPCに売る他に、露店を出して自分で売り捌く事も可能だ。首都に到達する事が最低条件であるため、冬夜たち二人にはまだまだ先の話ではあったが。

そのままくると方向転換して、騎士は歩き出した。が、信用していると示すその態度はどこか胡散臭い。彼の余裕がどこから来るのかを、二人は後ほど、身をもって知る。

騎士と別れた後、少しばかり緊張気味に行動していた二人だが、その日は何事もなく終わる。いや、それからしばらくの間、警戒していた二人に対して、ギルド側は何の反応も示さなかった。ギルドマスターが古参で、恐ろしく強いと聞くが……個人に対して喧嘩を売ったわけではない、思い過ごしだったかと二人の気が緩んだ場合に、変化が現れた。

村を出てすぐの場所に、胡散臭い魔道士が一人で立っていた。魔道士の三角帽子を被り、ローブを目深に、顔を隠している。

気に留めるでもなく、冬夜は魔道士の横を過ぎる。アキラと二人だから、いざとなれば挟める。村の目の前だ、逃げ込める。警戒は最小限だった。

「俺らに喧嘩売ってきたのって、お前等？」

質問に、振り返った時にはもう遅かった。錬金術の銃器が、魔道士の手にはあり、銃口は冬夜に向けられていた。一発撃ち出す間にアキラのランスが魔道士を貫いており、しかし、魔道士が次に大きく身体を捻るだけで、武器ごとアキラは吹き飛ばされていた。レベルが違い過ぎるのだ、こちらはダメージを食らい、魔道士はたぶんかすり傷ほどもないだろう。

錬金術の重い一撃で、冬夜はあっさりと殺られてしまった。姿が

掻き消える。

「トウヤ！」

一瞬、視線が外れただけで、魔道士の銃口はアキラを捉え、衝撃波と共に轟音を上げる。凄まじい風圧がアキラを襲い、瞬発力と圧縮空気の塊でぶん殴り、押し潰す。

こちらは一撃だ。吹き飛ばされた姿勢のまま、アキラの姿も瞬時に消え去った。

「やれやれ。身の程知らずが増えたよね、夏休みかっつての。」

ボソボソと独り言を呟いて、魔道士は鍊金の道具、シリンダーと俗に呼ばれる筒型の銃器を仕舞う。ゴーレムさえ一撃で仕留める威力を誇る、かのギルドでも名うての鍊金術師だ。マスターの騎士同様、知らぬ者は少ない。もちろん、冬夜もこの魔道士を知っていた。ギルドが潰しに掛かってきたのだと悟った。

『我がギルド参入の新人に対する若葉狩りには報復する、』騎士は宣言している。

ベビーどーるとばんつ

殺された二人は、最初にここへ降り立った地でもある瀑布の広がる崖の端に戻されていた。

ログインと同時にここはコンテニユーの地点。地域ごとにコンテニユー地点は異なるが、初期エリアではダンジョン内でくたばろうが、村の入り口付近でくたばろうが、必ずここへ戻るのだ。一番最初のチュートリアル・フィールドの隣くらいの場所で、ここは岩場ではなく、若草の生い茂る岬の先端。

冬夜は裸同然の格好で中空に現れた。受身も取れぬままに、どすん、と落とされる。転移以前の、敵からの攻撃の余波が残っていて、大の字に伸びたまま身動きも出来ずに居る。息が詰まるほどの衝撃を食らい、文字通り息の根を止められて。だが、爽快な気分だ。

いつかは、俺も奴等になる……！

到達目標の一人が、思う以上のバケモノであってくれた事が嬉しくて堪らない。自然に笑いがこみ上げてきたところで、もう一人も転移されて来た。冬夜の寝転がるちょうど隣に、目を覆いたくなる姿となったアキラが。男はパンツ一丁、女はベビードールにボクサーパンツ。さすがにブラとショーツのみ、という格好では倫理委員会が黙ってはいないという事か。それでも女性に免疫のない冬夜などにとっては十分目の毒だったが。尻から着地したアキラは、転げまわって痛がっていた。

VRMMO、テスト段階では数々の問題点が指摘されたが、その一つに痛覚の問題がある。怪我を負うような衝撃を受ければ、痛い。この「痛み」の許容量には個人差があり、一律にしてしまうと、片方で死者が出る危険性があつたのだ。結果、刺される痛みは現実の痛みとはほど遠くなった。それが、後に大きな社会問題を引き起こすのではないか、と危惧されている。

「やっぱ、古参は強いな、アキラ。」

「金掛けてりや、当たり前。」

素直な感嘆に、やはり彼女はひねくれた答えしか遣さない。

瀑布の轟音は音声を抑えてある。吹き渡る風は心地よくて、このまま眠ってしまいたい欲求に駆られる。冬夜は仰向けでぼんやりと空を眺め、アキラはうつ伏せて肘立ちになり、その辺の草をちぎっては風に飛ばしていた。

バーチャルリアリティのゲームが家庭用機で実現した後に、ネットゲームへ移行するまで、さほどの時間も掛かっていない。しかし、一般家庭への浸透率は低く、VRMMOのタイトルも数えるほどだ。話題性はある、けれど手が届かない、高嶺の花。

このゲームがリリースされて、もう一年近くになる。平均水準よりは裕福な家庭で、恵まれているはずの冬夜でさえ、参入するのに一年遅れた。企業は譲歩するつもりはない、VRと付かない旧来のMMOは、これからどんどん消えていくだろう。ビジネスに追いつられながら、プレイヤーはVRへの移住を余儀なくされる。後になればなるほど、先発組との格差は開く。

そういった未来図まで頭に思い描いて、冬夜は必死にアルバイトをしたのだ。今ならまだ先発組に入れる、後続に入ってしまったら、どう足掻いても縮みよのない格差に組み込まれてしまうから。

結局のところ、現実もバーチャルも、大した違いなどない。

ふとした思い付きだったが、隣の美少女に目を向ける。相変わらず草をちぎっている。

面白くなさそうなアキラの表情が気になっていた。何も聞けはしないから、結局は黙って空を見る。

ゲームの中だけの関係性で、リアルの情報は何も言いたがらない者も多く、必要もなしにそういう情報を聞きたがる者は直結厨呼ばわりで嫌われる。嘘八百を並べ立てるか、当たり障りない程度で収めるか、リアルになどあまり関心を持たぬ事が暗黙のルールだ。V

Rは恋愛用には作られていない。五感が再現されるといっても、生殖器に関しては男女ともツルツルだ。無用だから。

下心のある者は、ゲームは二の次でリアル情報を聞きたがるから、直結と呼ばれ蔑まれる。誰も他人のリアルには立ち入らない。だから、冬夜は相棒の現実を、何一つ知りはしなかった。

彼女が本当は男なのか女なのか、年は幾つで何処に住んでいるのかさえ。

この、高価な機器を必要とするゲームに参加しているくらいだから、それなりの家庭環境に違いない。銀行にあった白銀の鎧は課金アイテムでかなり高額だ、恐らく大学生以上だろう。自分のようなラッキーな事情があつたとしても、アイテムまで持てるとは考え難い。あるいは、よほどに金持ちなのか。

勝手な推測で、自身とさほど変わりはない、と思っている。

けれど、他のプレイヤーを見る時の、アキラの陰鬱とした瞳が嫌な予感を掻き立てもした。

勇壮な自然をバックに、ログイン地点には珍しく誰の影もない。

下着姿の男女が一組だけだ。

気まずい、と冬夜が思う間もなく、突然アキラが突拍子もない行動を起こした。

頭の上で両腕をぴんと伸ばして手を組み、円錐を表現したかと思う間に。

「ごろごろー、」

ログイン地点の草原は、なだらかだが坂になっている事を忘れている。

ほどなく、回転は高速を極めた。

「ぎゃー！ 止めて、止めて！」

「馬鹿だろ、お前……」

半身を起こして成り行きを見ていた冬夜は、呆れたように顔を手で覆った。

仕方なく起き上がり、駆け足で、転がっていった少女の後を追う。
「目が……目が廻る……、トウヤの馬鹿がつ、止めてくれたっていいじゃん、」

村の手前で止まった彼女は、身体中に若草の切れ端を纏っていた。簡易エルフの出来上がり、に見えた。冬夜は手を差し出して、助けてやろうという意思表示をする。

けれど、アキラはすぐにその手を取らず、じっと冬夜の顔を見上げていた。

「ん？ なに？」

少しの期待が鼓動を速めた。一瞬だけだが。

「ん、なんでもない。」

結局、アキラは冬夜の手を取らずに、自力で起き上がった。

冬夜は少し残念な気持ちでその背中を見る。

背を向けたアキラ。

彼女の思いは、当然のことで冬夜には見えない。

憎いんだろうか、冬夜のことか。そう思っている彼女の心は見えない。

べびーどーるとぱんつ（後書き）

用語説明：

<べびーどーる>女性用下着の一種。キャミソールのひらひら版。いや、キャミソールとの明確な区別はない。勝負下着。スケスケだったりひらひらだったりヒョウガラだったり水玉らぶりーだったりする。運営GJなアイテム。ゲーム内でのスケスケ具合は自重されている。

ちなみに男性のパンツはゲンゼだったが、度重なる抗議によってトランクスタイプに変更された。【血の涙運動：スローガン「血の涙も大河となれば・・・！から】

かがみのなかのアキラ

裸で戻ったプレイヤーは、相手がモンスターなら裸でマラソンをする。急いで戻れば大抵の場合、所持品はすべて戻ってくる。相手がプレイヤーなら、諦めて予備を使うか店で買う。多くの場合は、戻っても一切合財を奪われた後だ。二人の場合もPKだが、もしかしたら所持品はそのまま放置されているかも知れない。いや、たぶん、放置されたままだろう。高レベルプレイヤーから見た初心者を持ち物など、ゴミでしかない。

わざわざ拾い集めていくとは考えにくかった。

だが、村の、フィールド側への出口は塞がれている。障害物やバリアの類が張られているわけではなくとも、二人にははつきりと感じ取れた。さっきの魔道士とは違うプレイヤーが草の上に座り込んでいたからだ。ギルドから送られた二人目の刺客は、今度は女の子だった。彼女も冬夜の知る、有名なエルフだ。

交代で、冬夜たちを見張っているのだろう。敵に回したのは大きなギルドだ、人数なら幾らでも調達出来るらしい。しばらく仕掛けて来なかったのは、二人のログイン時間を割り出していたからか。掲示板辺りで探してみれば、その辺りの事情は出てきそうだと思えた。

「ヤバい事になったなあ、」

村から敵を眺め、腕を組む。冬夜は黒のツナギ服を、アキラはまたメイド服を買った。

「これじゃ、ジリ貧だ。」

眺めていても仕方がないので、くるりと踵を返す。出てゆく度に瞬殺され、殺される度に装備を新調していたのでは、幾ら資金があっても足りない。一番安い装備しか使わない事を信条とする二人であつても、だ。粘着への対処ならば幾らでもやり様はあるのだが、相手は逆恨みでしつこく嫌がらせをしてくる類の連中ではないため、

訴えてみても粘着という判定はしてもらえそうにない。元は自業自得なのだし。

運営に泣きついたところで、自力解決を求められるのが関の山だと思った。

「店の中に戻るか、」

多くのプレイヤーとすれ違うこの場所は、まるで晒し上げられているようで、気分が悪い。行きかう人々が遠慮がちに視線を投げかけてくるのは、事情を知っているかのようにしか思えない。どうにもバツが悪く、人の出入りが比較的少ない雑貨屋へと移動する事にした。拠点の村は雑貨屋が衣料店を兼ねる。

衣装の類は、店で購入する。現実の店舗同様、商品の服が展示されているが、それを持ち出す必要はない。鏡の前へ立ち、胸ポケットにあるステータス・カードを操作するだけで商品の全てを試着する事が出来た。気に入れば決済し、試着した姿のままで店を出てゆける。自身の所持品から着替える場合は、ギルド受付所の鏡が代用となる。

VRMMOではポピュラーなこのシステムが、最近になってバーチャルショッピング街などに転用された。技術の発展は、新しいビジネスを産む。このゲームのスポンサーも、大手の商社だ。女性向けのブランドを幾つか展開する会社で、このゲームにもブランドと提携した衣装がコラボアイテムとしてリリースされている。もちろん、課金アイテムで、だが。

人気ブランドのコラボ装備はそこその値段だが、専用化というスキルが付いており、PKされても盗まれる心配がない。商魂逞しいというヤツで巧い手だとプレイヤー間では揶揄されている。男性プレイヤーがコラボ衣装を着ている事は少ないが、女性プレイヤーの多くが一着は購入しているともっぱらの噂だ。PKシステムを採用していなければ、もっと多くの女性プレイヤーを獲得出来ただろうに残念な仕様だ、とは掲示板でよく囁かれている話だ。

アキラは、興味がないらしい。それとも、単なる素振りなのか。どちらかと聞ける質問ではないから、気になっていても不問だ。

始まりの村の店舗は少ない、中盤以降に訪れることになる王都まで行けば、賑やかな市場まであるというが、まだそこまで到達出来るほどのレベルにない。村の雑貨屋は、兼業で衣装屋と武器屋を営んでいたから、それぞれの種類は本当に少ない。ホームページでのカタログ販売という方法もあるから、村から一步も出なくても、リアルマネーさえあれば最強装備を揃えるくらいは容易かったが。

暇なのだろう、アキラは珍しくコラボ衣装を試着していた。

「お、それ、似合う。」

何気なく言った一言で、アキラが冬夜を振り返る。咎めるような視線が、なんだか違和感いっぱいだ。

「買えないよ、」

責めるような口調で返された。

鏡の中のアキラはゴシック風味のワンピースを着ていた。今は無骨なハードランスや手甲を装備しておらず、少女はどこかのお嬢様に見える。素直な気持ちで感想を述べたまでだったのだが、と、冬夜は鼻の頭を指先で搔く。

「ヘンな癖。」

指摘された。

「そろそろ時間だよ、トウヤ。」

「あ、もうこんな時間か。……なんか、無意味に過ごしたような気がする、果てしなく、」

「レベル上げ出来なかったもんね、またね、」

鏡越しに会話をしているのが、なんだか可笑しい。くすり、と笑み、隣に立った。

「じゃ、またな。なんか対策考えとくわ、」

返事を待たずにログアウトした。

冬夜の姿が掻き消えた後には、少女が独りで鏡の前に立っている。彼女は、突然表情を厳しくし、そこに映る自分自身を睨みつけた。引き結ばれた小さな唇は、時折、何かを言いたげに震える。鏡に映る美少女。艶やかな黒髪に、潤みがちの大きな黒い瞳。睫毛が影を落とし、どこか儚げだ。ロング丈の黒いゴシックなワンピースを着ていると、確かに彼が言った通りで、安いメイド服よりも断然見栄えが良かった。

中身がどうあれ、このアバターにはとてもよく似合う。ここがゲーム世界だという認識が、突然、湧き上がり、同時に気持ちの悪さが戻ってくる。いつも、いつも、忘れようにも忘れられない現実が、この姿をバーチャルだと認識する度に戻ってきて、吐き気がした。

「あんたなんか、ぜんっぜん、似合わない。」

憎々しげに、ようやく吐き出した。

きもおた

このゲームをプレイするために、彼女は色々なものを犠牲にした。アキラの現実での名前は晶だった。西口晶。本来の自分とそっくり同じ顔が、この、バーチャルの世界で鏡に映っている。気持ちの悪い現実が、虚構の世界にまで侵食していて、胸が悪い。

鏡の前から離れ、アキラは武器庫へ移動した。そこでもおむろに無骨な兜を手に取る。装備を選択した当時の心境までが、まざまざと思い出された。

メイド服が一番安かったからだ、ハードランスは単なる趣味、しかし、両手に装着したガントレットはこの腕を隠す為のものだった。今日、同じ理由でヘルムが増える。フルフェイスで飾り気のない兜、通称でバケツなどと呼ばれている。ちょうど、バケツをひっくり返して被ったようなフォルムだから。

この、気色の悪い現実を覆い隠してくれるだろう。粘着質な執着の象徴を。

寒気がした。思わず身震いして、腕をさする。

あの男は近所に住んでいた。

晶の住むアパートの、同じ階で何軒か向こうの部屋の住民だった。親元を離れて独り暮らしをしている大学生だと、母親から聞かされた。ガマガエルのような脂じみた顔で、なんとなく気持ち悪い霧困気を持っていて、彼女を「あきらたん、」と呼んだ。典型的なオタクで、最初は好きになれなかった。

十代は残酷だ。生理的な嫌悪感を罪悪と感じて、晶は恥じ入った。見た目だけで気持ち悪いなどと断じた自分の方がよほどに醜いと。顔なんて、皮一枚でしかない。

身勝手なセンチメンタルが大部分と言えたとしても、晶は人を差別的に見たくはないと願う。

外見で判断するのは良くないと、自分から距離を置くことはせずに、晶は彼と普通に接しようとした。

彼、櫻井智之と。

「あきらたん、あきらたんにすつごく似てるアニメキャラが居るんだけどさー、」

熱っぽく語る彼に、晶は曖昧に頷いて聞いているだけしか出来ない。

智之の出す話題は、八割がたがアニメや漫画で、晶が知っているうがいが関係ないかのようによく立てる。悪気はないのだろう、あまり近所付き合いも良くはないと聞く。本人も人と話すのは苦手だと言っていたし。けれど、やっぱり、彼と話すのは苦痛のほうが大きかった。

正直、なぜ智之を構ってやり、話し込んでいるのかが解からない理由を無理やり探してみたりもした。

周囲から孤立して寂しそうに見えたのがいけない、ブサイクのくせに人懐こい、あの笑顔もいけない。いや、晶が、彼に中途半端な優しさを見せてやった事が、一番いけなかった。晶は、智之に残酷な期待を抱かせているとは思ってもいない。

話してみれば、キモオタのくせに、そんなに嫌なヤツではなかった。

友達としてならば、普通に付き合える程度には大丈夫だと思った。そこまで気持ち悪くはない、と。

十七歳、という若さ。晶の若さは、とても理想家で、とても残酷だ。

「あきらたん、VRMMOってネットゲームがあるんだけど、知ってる？」

知っているものにも、晶が以前からやってみたいと思っていたのがVRMMOだ。有名タイトルである幾つかのゲームは、晶の学校

でも話題に上る。普通のゲーム機すら持てない晶の家庭環境では、夢の向こうの話でしかないが。

晶の家庭は母子家庭で、とても娯楽に費やす余裕などない。

「知ってるよ。でも、家はそんな余裕ないもん。」

嫌な話題を逸らしてほしくて、晶はわざと拗ねた口調を作った。

このキモオタは、そういう心情だけは読むのが巧かったから、すぐに察すると思っていた。

夢見る少女たちは、バーチャルの世界で出会える王子や勇猛な騎士を望む。ダンジョンの奥で身を挺して庇ってくれるナイトを。架空の街の広場で見せびらかすに相応しい仮想の恋人を。リアルを引き摺ることなく、その場だけのごっこ遊びに興じてくれる素敵な大人を。

晶とて、そんな少女たちとまったく変わるところなどない。

得意げな智之の表情が、さらに得意げに歪む。正直、笑顔を作っても可愛いという形容からはかけ離れるだけだから、止めてほしいのだが。上目使いにそんな事を思い、口には出さずに言葉の続きを待つ。

「買って貰えたんだ、機器プラス、ゲームキャラクター枠一つ。」

「えっ！？ すごーい！」

「しめて98万えーん！」

どうだっ、と言わんばかりに胸を張る智之の態度がおかし過ぎる。噴き出して笑う晶に、得意顔はすぐさましかめっ面に変化した。

「せっかく、せっかく、あきらたんにやらせてあげようと思ってたのにつ！ 気分害したっ！ あきらたんにはやらせてやらないっ！」

小学生か、というツツコミは胸の内へ。笑いたいのを懸命にこらえ、晶は智之を見た。

本当に嬉しそうな顔をしていた。

VRMMOは出て間もないゲームだから、智之も本当にやりたかったんだろう。

「ごめん、」

心から素直に、そう言った。

この近辺は下町で、生活水準の低い家庭がひしめき合って暮らしている。このアパートにしても、賃貸料の安い、築何十年という古い物件だから、晶と同じような境遇の者ばかりが暮らしている。

だから正直、智之の家庭が裕福だとは思ってもみない。きっと、親御さんは無理をしたんだろうなあ、と。この暢気な大学生に説教してやりたいくらいの気持ちでいた。

きられないふく

キモオタ、と、内心で呼び慣わしている智之のことについては、晶の中での評価はまずまずという感じだ。嫌いではない。いや、むしろ好意的に見ている。恋愛では対象外だが。このまま、何事もなく進んでいくならば、もしかすれば恋愛に置いても対象の範囲に入れたのかも知れない。

女の子は残酷で夢想家だが、女は現実的であるから。

皮一枚、と論じておいて、女の子のそれは口先だけだ。

「プレイ動画とかやってるんだけど、あきらたん、観たい？」

ある日にも、智之はそんな風に持ちかけて、話題の糸口を得ようと必死の様子を見せた。

話といえばゲームかアニメ、そんな智之を鬱陶しいとは思っていない。他の話が出来る友人なら幾らでもいるし、彼女らは逆にゲームやアニメに興味がないから話したくても話せないし。

晶はゲームが好きだ。無料のMMOに登録した事もある。およそ、女の子らしくない楽しみ方で楽しむところがあり、男性ユーザーに混ざっている方が楽しいとさえ思っている。

「プレイ動画あったんだー。今度見てみるね、アリガト。」
誘われることは再三だ。

せっかく買ったのだから、プレイしにおいでよ、と。

それが本当に出来るかどうかを考えて言っているのか、疑いたくなる。会話はいつも戸外だった。ある日は玄関先だったり、エレベーターホールだったり。一緒にエレベーターに乗ることに躊躇がなくなっただのはつい先月だ。……それなのに言っているのか？と。

VRMMOのシステムでは、プレイ中の肉体はまったくの無防備になる。フルダイブという語感そのままに、全ての感覚をゲーム世界に持つていくから、ちつとやさつとの衝撃では目覚める事もない。専用のゴーグルなど、ごちゃごちゃした機械を装着するのだと話に

聞いてはいても、他人の家で気軽に借りるような類のものでない事くらいは解かりそうなものだと思う。

二人には温度差がある。

智之に下心がまったくないかと言えば嘘になるだろうが、無防備の晶をどうこうなどと考えてはいない。しかし、それを理解するほどには晶は智之に心を許しているわけではない。ただの友人だ。

小さな認識の違いは、いずれ重大な行き違いを生み出す。だが、気付くのは手遅れになった時点だ。

幻想交響詩〜ウィルスナ〜 …… 智之が登録したネットゲームのタイトルだ。ユーザーの活動が活発で、ファンブログやオフ会、プレイの様子を録画したビデオの投稿まで、ゲーム以外の自由度の高さが人気だった。大手のタイトルがあくまでゲーム内で出来る事柄の多さ…… フィールドの広さだとか、スキルの充実、ストーリー性を謳う中で、ウィルスナはナナメ方向に突き抜けている事をアピールしていた。

PKが出来たり、強盗がセオリーだったり、動画サイトへの自由な投稿を許していたり。

晶はもっぱら、コラボしている女性ブランドの可愛い衣装ばかりに興味があったのだが。

「学校の友達がさ、コラボ衣装着て颯爽と戦う女戦士がカッコいいってさー、おんなじ服を買っちゃったワケよー。」

うんうん、と興味深げに聞いているキモオタに、意味深な笑顔を。アニメよりゲームより、晶のリアル友人たちの話題が、智之にはもつとも食い付きがいい。…… キモオタだから。

オンナノコに餓えてんなー、と片端で思いながら、晶は話を続けた。

「実際の自分に似合うかどうかとか、考えてないのよねー。で、その服、どうしたの？て聞いたらさ、ヤフーで売り飛ばしたって。それがまた、買った時の半額なのよ。」

頭悪すぎだよね、と締めくくると、智之は予想とは違う反応を返す。

「で、でも、ほら。ゲームの中なら、自分の方を変えられるんだし、その服はゲームの中でもう一度買ったら良いんじゃないかなあ。」

「……そう？」

「だってさ、理想の自分になれるんだもん。それに、ゲームのアイテムの方が断然安いって！ 女の子ってすぐ飽きちゃうじゃん、すぐ新しい服買っし。なら、ゲームの方が嵩張らないし、いいと思うよ。」

リアルとバーチャルをごっちゃにすんな、と思ってしまっ。けれど、面白いとも思う。きつと智之は、リアルを捨ててしまっていたんだろう、架空の世界でなら相手にしてくれる者は沢山居そうだったし、居心地の良い空間に逃げ込んでいたのだ。ずっと、長い間。

そう思ったりした。

「ゲームの中で、アコガレの自分を表現すんのは、アリだと思う！」リアルがダメなら、バーチャルがあるじゃないか！ 智之のその言葉は、甘い誘惑を含んでいる。そうね、その通りだね、とは言えないまでも、一時現実から逃げ出したい場面ではきつと有効だろう。こんな時、晶は智之の株を一段引き上げる。

キモオタのくせに、カッコいいこと言うんだ。

キモオタの智之が、妙に眩しく感じられる瞬間だった。

ウィルスナの公式ページから、リンクを辿ってお気に入り衣装ブランドのHPへ。一通りニュースや新着アイテムを眺めてから、またリンクを辿ってゲームの情報ページへ。それがいつもの手順だったけれど、ふと、キモオタの言葉を思い出して課金アイテムのページへ入り込んだ。

ゲームのアイテム。所詮はデータに過ぎないアイテム。それが、こんな値段。

初めて知る現実。

高いのは、なにもハード機器ではなかった。

しつとちゅう

神様は不公平だ。

晶が落ち込む原因は、いつでも同じ事柄だ。運の悪い自分、運の悪い母さん。神様は自分たちを愛してくれていない。

父は事故で死んでしまった。保険金は家のローンで消え、家は生活費で消えた。今は下町へ引っ越してきてアパートを借りて住んでいる。母はフルタイムで働いているから、家事のほとんどは晶の仕事。義務教育の高校までは卒業出来たとして、大学への進学は経済的に無理だと思う。

高校無償化から何年で義務教育に引き上げられたんだっただか。今度のテストで出るかも知れない、ヤバイ。などと取りとめもなく考えて、絶望感を振り払う。

唯唯諾々と従うだけで、この現状をどうにかしようとは思えない。どうにかなるとも思えない。

片方では、100万もするゲームで遊ぶプレイヤーが何万人と存在し、片方には、自分と同じような境遇の人間がひしめき合う下町がある。これが、現実。

ブランドの衣装だから、ちょっとお洒落なワンピースが何万円もするのは解かる。けれど、ただのデータが、同じ形になるだけで何千円に化けるのは正直おかしいんじゃないかと思う。手が出せない金額じゃない、ちよつと背伸びしたら届く。千円札が2、3枚程度。だけど、その同じ額を母さんが稼ぐのに何時間働かなくてはならないかを知っている。投資家はただ座っているだけで何百万も稼ぐのだという。

神様は、不公平だ。

悲しみに似ていた憂鬱は、いつの間にか怒りとも呼べる苛立ちに変化した。

キモオタが薦めてくれたゲームのプレイ動画の中でも、実力に沿わぬ装備を持つプレイヤーを狙って襲い掛かるコンセプトのものを選んで見ていた。レベルが低い、あるいは大した戦闘センスもない弱い者達が、実力に見合わぬ高ランク装備を使うことが許せない。襲い掛かり、身の程知らずを叩き潰し、身の丈に合わぬアイテムを奪い、売り払う。無に帰する。胸がすく思いだ。どこか、心の片隅ではそれが醜いものだと思いついて、冷めた思いもある。

本人たちは『義賊』と嘯き、しかし一部のプレイヤーには憎々しげに『嫉妬厨』と揶揄されている。確かに嫉妬の念が原動力には違いない、だが、彼らが正しいとは、晶は思わなかった。彼らの財力は、彼らの実力ではないと思った。

奇妙なロジックがそこにある。持てる者たちは財力……リアルさえ自分たちの実力と捉え、持たぬ者たちはゲーム世界から切り離れた。卑怯という感覚は、両方の陣営で逆方向を向く。

動画の画面に集う人々は、好き勝手に自身の意見を述べ合う。「GJ」「厨、乙」「氏ねよ、厨が」ほとんどが怨嗟の声。非難というより嫌悪感。リアル of 力を持ち込む行為をルールだと勝手に決めて押し付ける者たちは、自分たちの陣営が正しいことを信じて疑わぬ。彼らの心情が、どうにも気持ちが悪い。

晶は、持てる者たちが言う、自力で稼いだ金をゲームに投入することは不正ではない、という論理が、どうにも腹立たしいものを感じてしまう。理屈はよく解からないけれど。

なんだか、煙に巻こうとしているような……、論理そのものが捻じ曲がっていると、そう思う。リアル of 現実世界が格差という不公平に満ちて、偶然満たされた側に立っただけの者たちだ。それが、リアルとは違う世界にまで、己の有利を持ち込もうとする。それは厨坊 of 屁理屈じゃないのか、と。

説明が出来ないのが、悔しい。だから、力づくでねじ伏せる義賊たちを好ましく感じた。奴等の都合に合わせて捻じ曲げた理屈など聞く耳持たぬ、その態度はどんな英雄よりも心をときめかせてくれ

る。

「俺は、俺のしてることを後悔しない。

ウィルスナでは強いことが正義だ。弱いくせに粹がってる奴が悪い。ナメてる奴が悪い。そんなんだから襲われるんだ。出る杭は打たれるって言うだろ、わざわざ出てくる馬鹿がお前等、チートもだ。

俺だって最初は順当に行った、誰でもそうだ。強いってのは、単にレベルだけじゃねーし、装備だけでもねーし。古参のギルドがなんでチート断るか、その理由もわかんねー馬鹿ばっかだ。

金で買った強さなんていうチートが通用するモンかどうか、チート野郎に身をもって教えてやってんだ。」

義賊を名乗る男は嫌われていた。現実世界で100万という高額ของเกมで遊ぶ者達の中で、彼は異色だったのだ。マジORITYはむしろ彼の言うチートでもで、リアルとバーチャルを混同する輩だった。都合の悪い部分のリアルを切り離し、自分に有利な部分は平気で持ち込む、その厚顔さは気持ちが悪かった。十七歳という若さは、同時にどうしようもなく潔癖だ。

彼の言葉の大部分が、ひっくり返せばどうにもならないリアルの不公平感から来ていると、嫉妬厨乙と揶揄する奴等の言葉が必ずしも的外れではないとは思わない。ウィルスナというゲームも、そろそろリリースから一年が経つ。年数が経つごとに、格差は開く。不公平が生まれる。人間の作り出すコミュニティにおいてのソレは、どうしようもない宿命だ。

リアル社会においては是正されない格差が、縮小されただけの小社会では正される云われはない。新参の者は躍起になって古参の占める頂上を狙う。そのためになりふり構わない。手段を選ばない。

それでも、別世界に現実を持ち込むチートどもが、えもいわれぬほどに、気持ちが悪い。持たざる者は別世界で、別世界のルールで

生きようとしているから、連中は卑怯で気持ちが悪すぎる。

いつしか。

見守るだけでなく、自身も義賊として彼らを叩き潰したいと願うようになった。

かの大地に立ち、下種どもに恐怖を振り撒き、嫌悪される、自身の姿を夢見た。

ひらてうち

晶は、埋もれたランキングの中で、ついに自分自身と邂逅した。その動画を見た時は衝撃だった。晶とそっくりの顔をしたアバターが映っている。ハロウィンの魔女にも似た帽子を被り、シルクのような光沢の黒いボディースーツを着ていた。そして、くるぶし丈のブーツ。魔女ルックというものを、当時の晶は知ってなどいない。そして、動画の中の彼女は、複数の男性プレイヤーにかしずかれていた。周囲の男たちのギラギラした目が、トラウマ級に気持ち悪い。自身と寸分違わぬ容姿のアキラが、まるで趣味ではないエロティックな装備で撮影されている。撮影者の名前にも心当たりがない。……いや、もしかしたら。

キモオタ

激しい怒りがふつふつと湧き上がる。煮えくり返る憎悪。

キラメイクの仕方を知っているなら、当然の嫌悪。脂ぎったガマガエルのような男だ。あのあばただらけの顔がほっそりとし、すべすべの肌になるのは、バーチャルならば簡単だろう。糸のような目がぱっちり大きく開かれ、どんよりとした瞳がくつきりとした飴玉のような瞳に変わる。性別さえ変えて、執着する女の身体を正確にトレースしたのか。胸や腰のくびれは、実際の自身を見るようだ。どれほどじっとりと見つめ続ければ、ここまでそっくりになるのか。

あのガマガエルが自分に化けてゆく様子を想像するだけで、全身に悪寒が走った。

事実、ウィルスナや他のVRMMOのゲームでも問題になっている事柄だ。「実在の人物をトレースする」プレイヤーが引き起こし

た幾多の事件は訴訟にまで発展した。現在では、芸能人や有名人のトレースをすれば、一発でアカウントが停止される。それでも、規約の穴を掻い潜ろうとするかのように、一般人のトレースをするプレイヤーの通報は後を絶たない。

あまりにもリアルである為に起きた弊害の一つだ。

多くのプレイヤーは偶然でも誰かに被ることを恐れ、通常は自身の顔の整形程度に抑えるようになった。間違つて通報されても、元の顔が似ているだけだという明確な証拠となる。自然の流れだった。それでも、このアキラのような醜悪極まる過程で生まれるキャラは後を絶たない。まだ、中韓系組織が創り出す転売用アバターの方が、しっかりと対策が練られていて安全な程だ。業者によりけりという側面ももちろんあったが。彼らは元からの美女や美男子を連れてきて少し容姿をいじってから売りに出した。美男美女は中韓の雑誌モデルである事が多かった。宣伝行為の一環として、彼らの国では機能している。日本や欧米では法律の壁が立ち塞がり、彼らに一步出遅れた。

晶は即座に時計を見やった。午後6時24分。

キモオタがそろそろ帰ってくる時刻だった。何をしているのかは知らないが、大学の講義がある日もない日も、智之は毎日決まってアパートを出てゆき夕刻に戻る。出てゆく時間はまちまちだが、帰る時間はいつも定刻だ。簡単にパソコンをシャットダウンして、晶は上着を引っ掛けた。

早く帰っていた場合を考えて、チャイムを鳴らし、留守を確認してから帰りを待つ。自然、仁王立ちになっていたけれど、晶は気付かなかった。視線はまっすぐに、最奥のエレベータに。

どれほど待っただろう、激しい怒りが収まり出した頃合で、エレベータから降りる智之を迎える。怒りの感情などというものを、いつまでも持続していられるものではない、ただただ、彼がやった事に対する衝撃と、気持ち悪さだけがせり上がってくる。

なぜ、自分なのか。あまつさえ、嫌がらせかと思う衣装を着せられて。その上、更に、動画サイトに晒し上げられねばならないのか。理由を聞いたかった。聞いてどうなるとも考えず、どうあっても理由を問ひ質さずにはいないと、決意だけがある。エレベータを降りた智之はまたも暢気な笑顔を浮かべた。晶が待っていてくれるなどとは思わなかったのだらう。しかし、険しい彼女の表情を見て、いかに鈍感なこの男でも何事が起きたのだと気付いたようで、貼り付けた笑顔は消えうせた。

「どういうことなの？」

晶の質問に、最初は純粋な戸惑いを見せた智之だったが、すぐにバツが悪そうな顔に変わる。

「ああ、えへへ。……バレちゃった？」

イタズラを見咎められた子供の仕種。上目遣い。似合いもしない。「もう少し成長させてからお目見えの予定だったんだけどなく、バレちゃったか。」

勿体ぶった言い回しは、この場合、晶の苛立ちを加速させるだけでしかない。本人にどのような思惑があろうとも。晶の眉がつり上がった。智之は気付かなかった。いや、気付いてはいる。しかし正確に、すこぶる状況が悪いのだとは理解しなかった。

「あきらたんにプレゼントするつもりだったんだ！ もう少し育ててからと思っただけで、最初のフィールドって、コレ、なかなかレベル上げに向いてないって言うかさ、あの時点じゃカンストってゆーか！ 最初の村を出るのはやっぱり危険だしさあ……」

言い訳が続く。声に焦りが含まれている。

成長させる、育てる、という言葉が殊更に晶の神経を逆撫でていたが、つゆも気付かずに智之は墓穴を掘り進めてゆく。言い訳がましい言葉が紡ぎ出される度、晶の怒りに吹きつける。

「と、とにかく、上がってよ！」

今、思い出したという風に、智之は鍵を取り出しノブをひねる。

ガチャガチャと煩い騒音に紛れて、平手打ちの音が響いた。

なきむしながま

「キモい……」

「待って、ほんとにちよつとだけ待って、」

怒りにわななく晶の手を、智之が慌てて掴む。即座に振り払われ
ても、何度でも握り返した。

「ごめん、あきらたん、ごめん。そんなに嫌がられるなんて思わな
かったんだ、ほんと、ごめん、僕が余計なことしたから、謝るから、
……ごめん、」

智之の細い目に涙が溜まっているのを見て、少しだけ晶の激情が
薄れる。

悪気があつて……あんな事する奴じゃ、なかったっけな、

それでも、捕まえにきた太い指をまた邪険に振り払った。

「あきらたんにあげるつもりだったんだ、本当だよ、今度の誕生日
にプレゼントしようかなあつて……それで内緒だったんだよ、やま
しい事なんかぜんぜんしてないよ！ 神様に誓っても、絶対だよ！」
差し出す手を何度伸ばしても振り払われる、半分泣き声の智之の
弁解が続く。

「ほんとだよ……、喜んでもらえると、思ってたんだ……」

ついには、ガマのような顔をぐしゃぐしゃに崩して泣きはじめた。
俯いたまま、それでも晶は耳に届く智之の言葉を聞き漏らさぬよ
うにと勤める。顔も見たくない、そう思うから俯いたままにいるの
だと思っていた。なのに、懸命な彼の言葉を逃さぬようにと耳をそ
ばだてている。許すチャンスを探している。

どうにも生理的な嫌悪が断ち切れず、すがりつく手は触れられる
前に叩き落してしまうけれど。

キモオタで、暢気で、悪気などないのに人の神経を逆撫でる、ど

うしようもない奴。

けれど、憎いほどではない。気持ちの悪さはいや増してしまったけど。嫌いではない。

「あきらたん、……あきら、たん、」

ぐずぐずとすすり上げるキモオタは、やっぱりどう言い繕ってみても気持ち悪い。

気持ち悪い、はずなのだけれど、どうにも嫌いにはなれない。キモ可愛いとか言うのだろうか。

「もう、いいよ。悪気はないっていうんなら、さ。」

肩を震わせてぐずっている年上の男。その肩をぽんぽんと叩いて、晶は告げた。相手から触れてくるのはどうしようもなく気色が悪いのに、自分から触れるぶんはそう思わない。不思議なものだ。

「ごめん、本当にごめん、」

何度でも頭を下げる智之に、晶は閉口ぎみに手を振った。まるで犬を追ひ払う仕種。

こういうしつこいところはウザいと思う。

「もういいってば！

あ、でも、あたしのキャラはなんとかしてよね！ 気持ち悪いから！ マジで！」

思い出した本題を、ついどのように付け足して、どうにもおかしいと首を捻った。そう、それこそが本題だったはずが、なぜ、こうなった。

「ええ！？ だって、だって、あきらたんの為に作ったんだよ？

せつかく育てて、魅力値なんてすごい高いのに、消しちゃうの？」

さも勿体無いというような言葉に、晶が逡巡する。決意がぐらぐらと揺れているのを見透かしたわけではないだろうが、畳み掛けるタイミングでキモオタが更に言葉を上乘せた。

「キャラ削除したら、枠ごとパーになっちゃうよお、あきらたん。

勿体無いよお、僕は絶対に使わないからさあ、あきらたんが使って

よお。僕は自分の分をまた買うつもりだからさ、絶対にアキラたんには入らないからさあ！　お願いだから、消さないで！」

苦心して育てたキヤラは可愛いものだ、どうしても消したくない智之が必死になって晶を説得し、頭を下げ続ける。土下座でもしそうな勢い。

「お願い、あきらたん！」

ついに、晶が折れた。

「……しょーがないわね……、」

「あきらたん！？　」ぱあっ、と泣き顔に笑みが浮かぶ。

「言つとくけど、絶対にINしないでよ！？　あたしそつくりのキヤラにアンタが入ってるなんて、絶対、イヤ！　どんな嫌がらせなのよってくらいイヤ！　許せない！　解かった！？　」

内面でどれほど傷付けているかも気付かないほどの勢いで、晶が猛烈に抗議をして智之をなじる。

それでも自身が全面的に悪いと自覚して、智之は小さくなりながら耐えていた。

顔や見た目は、本人のせいではない。でも、智之がイケメンなら、ここまで激昂しないのだ。

「あきらたん、僕、来週から就活に入るんだけどさ、帰るのは10時頃になると思うんだ。だからさ、あの……鍵、預けときたいんだけど、どうかな？」

どう、というのか。またしても晶の機嫌ゲージがダウンする気配に、キモオタ智之がびくびくと身を縮めた。

「いや、だからさ、……僕が留守の間にさ、あきらたんがアキラたんを動かしたらいいんじゃないかなあ、て……ごめん、」

晶の上目遣いの睨みに射竦められ、小さく縮こまった小さい声で智之が最後にもう一度「ごめんなさい、」と呟いた。

ため息をひとつ。

どうしてこのキモオタは、こんなにも人を惑わすのだろう、と晶はこめかみを指先で押さえながら思案する。とても魅力的な誘いだ、けれど、すんなり受ける気になどなれるわけではない。

ふくすけ

現在、リアル時間で午後8時。

ゲーム世界ではリアル24時間は48時間換算で時計が進む。

晶は、智之の提案を事実上受け入れているから、ここにいる。

小ずるいことを考える奴でもないから、と考えての判断は、やはり晶がまだ子供だからであり、後の軋轢の発生や困った事態への発展、という連想はまだ持ち得なかったからだ。

そして、高価なゲームへの誘惑はどうにも絶ち難い魅力があるのだ。最低限の用心として、部屋の鍵を掛けた上にチェーンまで下ろしている。智之が帰ってきたら困るだろうとは思うものの、何処かでキモオタが困るくらいは構わないという念がある。数ヶ月のうちに、二人の立場は対等ではなくなった。

「トウヤ、あれどうなった？」

アキラに聞かれ、冬夜はぐつと親指を立てる。どうやら問題は片付いたらしい、とアキラがほうと息を吐いた。例のギルドに睨まれて身動きが取れなくなってから、もう一週間も無為に過ごしている。「これからメンバー何人が居るとこへ出てって、侘び入れて、終わり。」

「えー！？」

結局は頭を下げねばならないのだと知って、アキラが不満の声を上げた。

「なんで！？ PKはゲーム内で許されてるんだから、正当な権利だよ！ こっちだって、始めたばかりの頃は力もられたりしたのに、なんで謝んなきゃいけないんだよっ！」

相手が悪かったのだ、それは解かかっていても納得がいかなかった。こんなところでもやはり、運の良し悪しだけで、待遇まで変わるというのか、そんなに不公平なのか、と。

いつか見た動画サイトの、被り物男の言葉を思い出した。

動画サイトに投稿する者は、うぶ主と呼ばれる。自身の創作発表の場としての利用、コミュニケーション目的の利用、あるいは意見発表のための利用で動画が溢れている。

ふくすけの被り物で顔を隠して、うぶ主は言った。

「俺は今日、勤めてた会社に辞表を出してきました。」

動画には視聴したユーザーからのコメントが付く。この場面ですでに悪意あるコメントが投下されていた。氏ね、だとか、甘えんな、だとか。

「どれだけ頑張っても、努力しても、報われる社会じゃねーんだよ。お前等だつて解かつてんだろ？」

コネだとか、学歴とか、そんなんだつたらまだいい。まだ納得すんよ。ソイツ等は学生やつてん時に一生懸命勉強したんだろうからよ。俺は遊んでたもんな。

でもよ、違うんだよ。上に行くヤツ等はそんなに評価されてんじゃねえんだ、アイツ等はゴマ擦って媚び売って、仕事なんか出来ねえのに上に行くんだよ。実力じゃねえんだ。

肝心の、仕事の能力なんか評価の対象じゃなくてよ、どんだけ世渡り巧いか、目立てるか、中身なんかどーでもいいんだつてよ、一瞬目に付く派手さがあれば、それでいいんだつてよ！

出世コースに乗っちまえばよ、後は会社が一から育てるからいいんだつてよ。そりゃ、確かに理に叶ってるかも知れねーよな、他の社員と区別して英才教育すりゃあ、どんなボンクラでもそれなりに使えるようになるだろうよ。

だからよ、俺みたいに色々資格取ったり勉強したりは無駄なんだつてよ。それより、目だつたヤツが勝ちなんだつてよ、目立っただけの、ヤツがよ！

……ばっかみてえ。だから辞めたんだよ。

社会全体が馴れ合つてんだよ、おべんちゃら言うヤツばっか評価

して、本当の事言ったり動いたりするヤツは煙たがられる仕組みが出来上がってんだよ。

そんなんでいいのか？　なあ、それってただの無駄じゃねえの？　そんなんで会社の発展だの日本の未来だの心配してよ、馬鹿だろ。何が原因か、解かりきってんじゃねえかよ！」

ふくすけが吼えるたび、嘲笑と同意のコメントが吹き荒れた。

実力など無くても、大勢に媚びて尻尾を振ったヤツが勝ちなのだ。要領の良さが問題なのであり、才能など二次、努力など踏みにじられるだけなのだ。

現代社会のどこもかしこも、そんな風になってしまっているのだ。これで社会全体が閉塞しないというなら、そう考えるヤツがイカレている。

仕事に必要な能力ではなく、いかに自身を売り込めるか、そんな下らない能力が評価される。評価する側の目が腐っている。日本社会の低迷は、評価基準の間違いから起きた。

真に優秀な人材は、多くが海外に流れてしまっている。

悔しくて、悔しくて、涙を流しながら、呪詛の言葉を書き綴った。『どっちが甘えてんだよ、屑ども。能無しが、テメエも同じだから否定してるだけだろ。』

『才能なんかじゃねえ、媚売って要領よくやっただけだろ。』
忘れ果てていたあの夜の悔しさが、また戻ってきた。

えるふたち

約束の場所は村長の家の裏手だった。

本当の初心者にはしか用がなく、しかもこの家屋の玄関先以外はほとんど人が訪れない。イベントは玄関を出入りするだけで終わってしまうからだ。

おかげで、ちょっとした井戸端会議の集会所のようになっていた。二人が来た時には、すでに相手ギルドのメンバー数人が屯している。それぞれが適当に座り込んでいたり、壁にもたれかかっていたりで、けれど一斉に二人を見た。

「あつ、来た来たー。」

以外なほど明るい声が掛けられた。見た目は子供のウィッチがにこにこ微笑んでいる。ピンクのロリータファッションで、武器やロッドを持たず、くまのぬいぐるみを抱いている。……一応、武器扱いのアイテムだが。彼女の隣の露出系エルフが手招きした。

「ちょーっと待ってねー、ギルマスは遅刻の常習者でーす。」

今どこら辺？と尋ねるハイエルフに、隣のダークエルフが胸ポケットのカードを取り出した。

「んーとね、ドラゴンに蹴られてる。」

二人は見た目女性で、仲良く並んでウィッチの隣に座る。壁にもたれていた男性エルフが独り言のように話す。

「上級クエストだったか、ギリギリって感じだったけどやっぱランクアップしてたっばいな。」

なんの話だか解からないのはアキラだけで、冬夜はなんとなく会話内容の予測が付けられた。こそこそと、彼らの注意を引かないように気を配りながらアキラの耳に口を寄せる。

「王城クエストみてえ。プレイヤーのレベルで敵のボスが変わるんだよ、で、上級になるとドラゴンが出てくる鬼畜仕様。」

「……うへあ。」

解説を聞いたアキラがげんなりという表情で答えた。

「倒したっ！」

「倒したっ！」

「おー、倒したー！」

拍手とともに暢気な歓声が上がった。携帯のワンセグ状態で観戦していたドラゴン戦の決着が付いたのだ。問題のクエストがソロクエストで、助っ人は同じギルドのメンバー限定になること、ギルド登録者ならば仲間のクエストをギルドカードで観覧出来ることなどを、冬夜の方は知っていた。

いつの間にやら二人は中に入って、一緒に観戦と洒落込んでいる。思わず、拍手にも釣られてしまった。

鬼畜仕様のクエストで、たったの三人でボスを倒した。もちろん助っ人の二人は一番強いマスターとサブが付いているとはいえ、あくまでサポートに徹していたらしく苦心惨憺たる戦いだ。

クエストを請け負ったメンバーの戦いはお世辞にも巧いとは言えず、何度も死んではここに居るメンバーたちの遠隔サポートで生き返らせて貰っていた。

エルフ族だけが、遠隔で回復魔法を使うことが出来る特典がある。だから、彼らは他のクエストや自分の用事を後回しにしてここに集まっていたのだろう。

あの時、自分たちを瞬殺してくれた魔道士が、転びまろびつしながら必死に戦っている姿が、まるで嘘の世界のように感じられる。敵のドラゴンはどこまでも強く、どこまでも巨大で、こんなモンスターがいずれは自身の前にも現れるという事が信じられない。いや、信じたくない。

今ひとつ盛り上がれない二人を気遣って、男性エルフが声をかけた。

「あー、ごめん。予備知識ないのに、いきなりキツイ映像だったかな？」

エルフは紙装備しか使うことが出来ないため、彼の装備もとても軽量なものだ。人間には使用不可のハイロングボウを肩に背負い、銀色の髪を後ろで束ねている。

近接武器禁止のエルフは上級プレイヤーご用達とまで言われ、使用者はあまり居ない。パーティプレイには何かと便利ではあるものの、初期のうちは攻撃力不足の上に紙装備ですぐ死ぬお荷物、本領発揮は上級クラスのクエストから、と使えないキャラNo1と評判だからだ。

世知辛いこのゲーム世界においては、まず真っ先に狙われるため、育てるのは至難の業。もはや、最初期の黎明期に生まれた世代しか居ないだろう、とすら言われていた。

「アンタたち、ギルド入ってないんだってー？ 珍しいねー、なんでー？」

強くなれば、有名なこの露出系エロフのように、スリング・シヨットで蹂躞プレイが出来たものだが。

ビキニ・アーマーのみ。

いっそ清々しいほどの矜持を滲ませて、彼女は地面の上に佇んでいる。体育座りで。

てうち

「ごめんねー、待たせちゃってー。」

ロリなウィッチが二人に言った。

「いや、別にいいですよ……。」

冬夜は可能な限りの用心をもって、ギルドメンバーたちに接している。ここでヘタな事を言って喧嘩にでもなれば、手打ちの機会を逃してしまう。

これは、ヤクザ同士の抗争となんら変わらないことだと、冬夜は考えていた。

いわば、相手の組は関東一円に名を知られる武闘派組織、こちらは出来たばかりの弱小だ、アキラがどう思おうが天地をひっくり返したって勝てない相手に逆らうことは得策でない。

今は引く。だが、あくまで「今は」だ。

ギルマスとサブのレベルは、さっきの戦いを見る限りではカンストに近いだろう。ベータ版の頃からやっていたなら、当然想定すべき事で驚くにも値しない。

そして、このギルドのメンバーの多くも、彼らに順ずる高レベルプレイヤーばかりと見るべきであり、なおさら、たった二人の初心者ギルドが勝てる相手などではなかった。

手打ちだ、とにかくこれ以上に抗争を続けることは互いに何のメリットもない、互いの面子……プライドの問題であり、ここはこちらが折れねば終わらない。

頭一つ下げたところで、何のペナルティが付くわけもない、それよりこれ以上に意地を張ることで受ける損害の大きさを冬夜は計算していた。

不貞腐れた顔を隠しもしないアキラの隣で、冬夜はあれこれ打算を巡らせている。

そこへ、ドラゴン戦を終えた三人がレポートで移動してきた。

「おそーい、お客さん待つてるよー、」

「済まん、まさかのドラゴンがお出ましでな、ちよつとばかり苦戦した。」

「どこがちよつとだよ、レオさん踏まれてたじゃん。」

男エルフが口を尖らせて噛み付いた。

スタンプ攻撃というモンスター側の攻撃スペルで、これを食らうと高レベルといえども大ダメージを蒙る。一瞬でギルマスの体力ゲージが1cmになったのを思い出した。瀕死、である。

「踏まれてやんのー、カツコ悪ーい。」

エロフがケラケラと指差して笑った。

ギルマスの名が呼ばれたのは初めて聞く。カードで確認すると、確かにレオとだけ書かれてあった。

ビキニのエルフが、大学ノート分ほどに広げて展開していた自身のギルドカードを元のサイズに戻す。テレビ観戦をするために、大きさを変更していたのだ。

とにかく全ての操作をこのカード一枚で行うため、カードの形状・能力は自在に変化した。

本来なら大画面で見たかったところだが、動画サイトのライブではなし、プライベートに関わるということでギリギリ大学ノートの大きさに決定された経緯がある。

「えーと、かなり時間食っちゃったんだけど、時間はまだ大丈夫か？」

どうやら、こちらのIN可能時間を気にかけているらしい。冬夜は即答で頷き返し、アキラは「あつ」と小さな声を上げた。

「もし拙いなら、また後日でも時間作るけど？」

「あ、いや、いいです。もう今日中で片付けておきたいんで。」

アキラがムリなら冬夜一人で聞く、という態度で答える。アキラが両手を擦り合わせ、「悪い、」とだけ言い残してログアウトした。

一応の、相手に頭を下げる態度はむしろ冬夜に気を遣ったことだ。アキラが消えてすぐ、冬夜が大きく頭を下げる。

「まず、先にお詫びします。すみませんでしたっ、」

本当は詫びなど入れたくない、その感情がどうしても声に乗せられてしまう。けれど、冬夜の予想に反してギルドの連中は誰もその事を気にしなかった。

「いいよ、いいよ。こっちも大人げないなーと思いながらやってんだから。悪かったな、イジメみたいなマネになっちまって。けど一応報復つてことにしないと、絶対マネする馬鹿が出てくるもんでな。こっちも色々大変なんだよ、ごめんな、お前等が悪いわけじゃないのに嫌な思いさせて。」

なんだ、解かってくれてんじやんか……、冬夜はギルマスの拍子抜けた返答に、ほっと胸を撫で下ろした。もっと、ネチネチと口撃されるものだと考えて、身構えていたのだ。

「このゲームもだんだん質が落ちてきてるからねー。」

エロフがぼやきのような言葉を発する。

「え、こないだ新ストーリー投入されたばかりだし、人も増えるじゃないですか？」

つい、言葉を挟んでしまい冬夜は慌てて口を嚙む。

「プレイヤーの質が落ちてるって話だよ。まあ、10万人突破とか言ってたし、それだけ居れば問題児も増えるのは仕方ないけどね。

マナーもへったくれもない連中がやたらと目立つようになって、目障りで仕方ないってことさ。」

男エルフが眉をひそめて言う。

「そうでなけりゃ、君等のこともとやかく言うほどの事じゃなかったんだ。PKが許されてるゲームだもの、新人狩りなんて当たり前の手段だ。だけど、頭のおかしいヤツつてのは、理屈がおかしいだろ？」

君等は見逃したのにどうしてこっちは見逃さないだとか難癖つけ

てくるのは目に見える。ケースがまったく違うと言っても聞き入れる判断力さえない。いや、自分が正しいことにするために、どんな屁理屈でも捏ねてみせる。

だからこつちも、全てのケースで厳しくせざるを得ない事になってるんだ。」

事件の発端を冬夜は知っていた。

ぬけがら

よくある新人狩りだと当初は思われていたらしい。だから、ギルドは動かず、当事者の新人に対処法を教える程度で済ませたと聞いている。

だが、狩人は味を占めたらしい、その新人は付け狙われ、粘着にも等しい状態になった。

ギルド員が同情して色々と融通してやった事も悪かったようで、いつでも装備の面で恵まれている状態でいたその新人は、いい力もと映ってしまったのだ。

あまりにしつこい狩人に、ついにギルド員の誰かがキレた。新人を囷に逆襲したことを切っ掛けに、狩人の新人狩りは止んだかに見えた。しかし、粘着が終わったわけではなく、むしろ陰湿な手段を取るようになっただけだった。

掲示板にはギルドの悪評が書き並べられた。それにも応戦する。

ヒートアップした挙句、最終的には狩人の粘着性が暴露され、誰も関わらないようになる事で、ようやく静かになった。ギルドの誰もが嫌な思いをし、掲示板でドンパチやらかした事で出入り禁止にも近い待遇を余儀なくされ、そこまでの犠牲をもって得たはずの平穏は、わずか二ヶ月で破られる。

粘着と化した狩人は完全な捨て身だ、結果的にはゲームからも追放されてしまった事をとて恨んでいて、ギルドのせいだと今でも時折現れては喚き散らしている。

そういった一連の事件を、冬夜が聞かずとも彼らは匂わせた会話にして振ってきた。

「俺たちも大人げなかった。人間が複数寄ればそれだけで、意思の疎通やら統率なんてのは難しくなるもんだ。やっきになって火消しをしてたんだが、匿名の場所だ、誰かが喧嘩を買っちまうんだよな。

そーゆーワケで、今ではギルドの規約になってる。『掲示板は覗くべからず』てな。……相手をしないのが一番いいんだよ、荒らしの相手する奴も荒らして言うたろ？

むこうもいつまでも拘ってないで、新しいキャラ作ってやり直してくれんもんかねえ。」

苦笑でそう締めくくったギルマスの言葉に続けて、エルフ男性が頷いた。

「粘着質ってさ、きっと人一倍深読みして不安がってるんだと思うよ。負けることを異常に畏れるけど、自分が悪いって認めたら、それで何もかも破滅してくらいに思い詰めてるんじゃないかな。」

新しいキャラ作ってやり直せって言われても、自分だとバレたら……とか、バレた後に責められたらとか、そんな後々の事が気になるんだろうなって。」

「そんなの、粘着して負けを認めないままにいる方が余計に痛手は大きいのにねー。」

座り込んだままのエロフが口を尖らせてそう言った。

現在進行形で被害は続いていて、けれどこれを冬夜に話して聞かせる意味は解からない。

「とにかくウチは掲示板への書き込みは禁止な、とくに雑談版。質問版はまあいいけど、面倒なのが沸いたら即逃げ、動画サイトへのアップも同じ理由で禁止ね。あとは何があったかな……」

動画禁止というのは、視聴者のタグ編集機能や感想欄があるからだ。かなり揉めたらしい為、妥当な対策だろうと冬夜は思う。同時に、なぜ部外者の自分にそんな細かい話をするのかと疑問に感じた。「ところで本題だが。……お前等うちのギルド入らん？」

単刀直入。

「え!？」

「……ただいまっ。」

ん？ 話進んでる？ ギルド誘ったトコ？」

サブマスの魔道士が割り込んで言った。今の今までブーツと突っ立っていたが、どうやらOUT状態だったらしい。本当に初期の頃のVR機器は居ながら席を外すという事が出来なかったが、現在は改良されている。現実の肉体にちよつとした異変、例えば誰かが近寄っただけで感覚が引き戻されるようにも設定出来る。目覚ましのけたたましいベルの音とか。その際に、緊急離脱の扱いでゲーム内の位置ポイントが確定された状態でアバターだけが残るのだ。用事が済めば何食わぬ顔で再度INが可能。

緊急離脱のON/OFFもバーチャル内で切り替え可能であったりして、緊急の意味を為さないという意見も聞かれた。その設定を利用して、リアルの用事で途中離席すると、この魔道士のような現象が起きる。

彼の場合、戦闘の際は緊急離脱をOFFにして、終了後、ONに切り替えたのだろう。

緊急離脱状態のキャラは、『又ケガラ』などと呼ばれている。又ケガラの間追い剥ぎをされるので、よほど気心の知れた者同士のギルドでなければ使われることはない。ちよつとしたイタズラは可愛嬌だ。

彼も、魔道士特有の三角帽子を逆さまに載せられている。初めて顔を見た。どんぐり眼にぶっくりした頬、帽子と魔道士のローブの中には子供が隠されていた。

小学生程度の設定は女性キャラには多いのだが、男性は珍しい、と冬夜は思っていた。

「今すぐ返事しろとかは言わないけど、出来たら2、3日で返事欲しいかな。あの短気なメイドさんとも相談して、3日以内に決めてくれると有り難い。」

三日の制限が付くことにも心当たりがある。

来週から始まる大型イベントに向けての、人的補強が目的なのだと。月曜日から始まるギルド対抗戦だが、このゲームはなまじのタ

イトルよりも凝っていて、一筋縄ではいかないシステムが組まれている。

今回のイベントタイトルは『カタック湖の主を釣り上げる!』、すなわち、釣りの勝負である。レベルも資金力もプレイヤースキルも関係ない。純粹な運試し。とにかく多くの魚を釣り上げたギルドが勝ちだという、一種暴力的ともいえる勝負方法だった。

だから、一人でも多くのギルド構成員が欲しいのだろう。

「仮申請って形でもいいよ、お前等もイベントは初めてだろ？ 参加資格は10人規模以上のギルド加入者だからな、イベントの間だけ合併するなんてのもよく聞く話だ。ギルドがどんなものかを知るのに、ちよつと入ってみるってくらいに考えてくれていいよ。」

いい返事を待ってるから、と言い残してギルドのメンバーたちは一斉にフィールドチェンジして、その場から居なくなった。

一人残された冬夜は、しばらくの間は黙って思案を巡らせていた。そして、ふと時間に思い至り、ギルドカードを確認してから慌ててログアウトした。

両親から許されているIN時間から一時間もオーバーしている。

作者自身が混乱してるために必要になった設定資料

篠井冬夜^{さやふゆや}…… ゲーム名トウヤ。本編主人公その1。17歳。アバター年齢は20代、3歳ほどサバを読んでいる。ゲーム内では黒髪ブルーアイ。ごく普通の性格。標準的中流家庭よりは金持ちの家に生まれている。レベル13、スナイパーズ・アーチェリー装備。黒のツナギ服。

西口晶^{にしぐちあき}…… ゲーム名アキラ。本編主人公その2。17歳。アバター年齢も17歳。黒髪、黒目。かなり短気。母子家庭の生まれで、生活は厳しいらしいと感じ取っている。メイド服にニーソックス、黒い靴。ガントレットとバケツヘルム、ハードランス装備。ハードランスは巨大な武器。

櫻井智之^{さくらいともゆき}…… 晶の住むアパートの近所に住む大学生。親の仕送りで悠々自適。キモオタ。顔はガマガエルに似ている。アキラをメイクした。

レオ…… 二人が喧嘩吹っかけたギルドのギルドマスター。古参プレイヤーで有名な人物。レベルカンスト。騎士職、白銀の鎧と兜、魔法剣装備。（幾何学模様のルーン文字が書かれた両手剣）同じシリーズの鎧一式をアキラも所持。高額の課金アイテムを普段から着用する猛者。

たつくん…… サブマス。古参プレイヤーで有名。魔道士のローブと三角帽子着用。錬金術のシリンドーで戦う。ゴーレムも一撃で葬る威力。レベルカンスト。どんぐり眼にぶっくりほっぺのシヨタ子。

名無し…… ギルド員。ロリータファッションのピンクなウィッチ。ロリっ子。ピンクのくまさんで敵をボコボコに殴りまくる。

名無し…… ギルド員。ハイエルフ男性。銀髪。ハイロングボウを装備。エルフ族には、遠隔操作で回復魔法を使える特典がある。その代わりに成長が遅く、装備は紙。近接武器禁止の縛りがある。

名無し…… ギルド員。ビキニアーマーのみを着用した露出系エロフ。種族はハイエルフ。弓手専用スキルのスリング・ショットを使う。

名無し…… ギルド員。ダークエルフのお姉さん。

* 人物が増えるたび、また、記述が増えるごとに書き足します。時々、最終ページへ移動します。

めっせーじ

晶がログアウトで現実へ戻って、すぐに気付いたのはしつこいチャイムの音だった。

「いつけない、」

時計を見れば、予定より30分も過ぎている。もう智之が帰ってきていてもおかしくない時間だ。

慌てて玄関へ向かえば、予想した通りで智之が情けない顔をして玄関ドアの隙間から中を覗き込んでいる。目と目が合うと、彼の目は涙まで浮かべた。鍵を持っていても、ドアチェーンに阻まれて中には入れなかったのだ。

「ごめん、ごめん！　すぐ開けるから！」

「あきらたーん、僕、今日はまっすぐ帰るからって言ったじゃないかー。」

大きな脂肪太りの身体が揺れて侵入の素振りを見せる。チェーンに肉が食い込んでいる様が滑稽だ。

思わず嘔き出してしまった。

ついさっきまでスレンダーな連中に囲まれていたせいで、普通に見ればどうという事もないはずの智之の体型が、ひどく醜いものに映る。最初、目に飛び込んだイメージはボンレスハムだ。

本来なら少々贅肉が付いている、という程度で、けして肥満体ではないのだが……。

連中もリアルでの姿などこの智之と大差ないのだろうが、なんとも言いようのない違和感を感じる。トウヤも、リアルではきつとあの姿ではないだろう。もしかしたら、この智之よりもヒドイ、という事さえありうる話で、なおさら何とも言えない気分に襲われた。「あきらたん、今日は遅かったんだねえ。もし気付いて貰えなかったら、どっかホテルでも行こうかって思ってたよー。」

智之の言葉が棘のようにチクリと晶の胸を刺す。本人は嫌味を言
ったつもりもない事は承知しているが、自分が悪いだけに少々バツ
も悪かった。

「ごめん、」

肩を竦め、両手を合わせて拝み倒す。

「あ、ううん、大丈夫！ 気にしなくていいよ、楽しい時って止ま
らないもんだからさ、解かってるから、大丈夫。」

玄関で靴を脱ぎながら、智之がフロアにまわる。お人よし、と
いうよりは気弱な性格で、そこに晶が甘えてしまう結果になってい
る。だが、甘えというものは、恋愛感情とイコールでは決してない。
そうとも知らぬ智之は、早く上がってジュースの一杯でも出して
やろう、などと考えている。慌てて靴を脱いで上がりこんだ智之の
横をするりと晶が抜けた。

「じゃ、あたし帰るね、母さんが心配しちゃうし。」

またね、と軽く手を挙げて、入れ替わりに玄関口で靴を履き始め
る晶に、智之の表情が暗く沈む。逃げるように去っていかうとする
その行動に気付かないほど鈍感ではなかった。

嫌われているわけではない、けれど、警戒を怠らないほどには不
審を抱いている。それが透けて見えた時などは、なんとも言いよう
のない嫌な感情が沸いてくるのだった。

焦りにも、自棄にも似ていて、慌てて打ち消さねば取り返しの方
かない事をしでかしそうな、そんな感情だ。人の欲求はどんどんエ
スカレートする。最初は話が出来ただけで満足だったものが、今で
は話をするだけでは物足りないと思い始めている。

苦しいのがなぜなのか、何を求めているのかも、とうに解かって
いる。

家に帰った晶はまず、母親に一日の報告のように会話を振り向け
るのが日課だ。むろん、全てを話すわけではない、かいつまんだも

のだったり、当たり障りないところだけをチョイスしたり。

智之の家でVRMMOをしている事などは、決して話したりしなかった。話せばどうなるかが解かっている、言い換えれば、危険の伴う悪い行動だと自分で解かっているという事だ。

子供というものはそこを深く考えない。だから、解かっているも理解しているわけではない。

母親は何でも報告してくれる素直な娘と信じていたが、実際の晶は母親が思うほど素直でも賢くもなかった。

嘘は吐いていないが、吐いているようなものだった。

夜になればメールをチェックするためにPCを立ち上げる。

ゲームの設定で、INしていなくても自分に届けられたメッセー
ジやプレゼントなどを見ることが出来るようになっていた。智之の
部屋から戻って後に来たものか、メッセーが一通とプレゼントの
アイコンが点灯して、存在をアピールしていた。

贈り主は「アキラ」だ。アキラからアキラへ。この場合、贈って
きたのは十中八九、あのキモオタ、智之だ。軽く溜息を吐いてから
晶は自分への貢物をあらためる。なんのかんのと理由を付けては、
色々なものをくれるのだが、鬱陶しいのと嬉しいのは近頃では半々
の感情になっている。

慣れというものは恐ろしい、相手の気持ちには鈍感になり、自分
ばかりが優先されがちだ。

プレゼントは後回しに、先にメールを開く。

『もし、トウヤさんに解決出来なかったら、僕に相談してね。友達
に頼めば、向こうのギルマスさんに掛け合ってくれると思うんだ。
あのギルドは有名なトコだから、喧嘩なんか吹っかけたら駄目だよ。
友達はそのギルドと張るくらい有名なギルドのマスターだから、
僕に任せてね。無理しないでね。』

……なぜだろう、苛立ちを感じた。

きねんBOX

冬夜はPCからアクセスして、掲示板の情報を収集していた。

アキラに知らせる前に例のギルドを詳しく調べておきたいと思ったのだ。一時的に身を寄せただけのつもりが強圧的に繋がれてしまうという事も充分考えられる。雑多な理由により新人を欲しがるギルドも、完全シャットアウトを敷いているギルド以上に多い。

運営側が、イベントなどで常に新人が居ないと不利になるように仕向けてくる部分もある。古参が居付いてくれる以上に、新人が多く加入してくれる方が運営には在り難い。古参が苦勞して入手したかつての伝説的宝具を、新人向けイベントでばら撒いた事すらある。古参プレイヤーと新人プレイヤーを秤にかけて、新人を取るゲームタイトルはとても多い。いや、それがセオリーとさえ言われた。運営にしてみれば、新人も増えるし、チートの抑制にもなるし、インフレ対策にもなる、お得な手段と言えるのだ。やられるプレイヤー側にとってはいい迷惑だったとしても、実害を蒙るのは運よく入手を果たしたごくごく僅かな人数だけだ。そんな極少数の意見などビジネスの前には薙ぎ倒されてしまう。

常に試行錯誤の運営陣は、あの手この手の延命策を弄しながらゲームビジネスをなんとか回していこうと努力する。その努力が時としてプレイヤーに多大な損害を与えたとしても。

運営の代理人たる預言者は言う、『過去の栄光に縋るべからず、常に未来の冒険に身を馳せよ』と。

「ガタガタ言わずに課金しろって意味だよな。」
口を尖らせて、冬夜は一人呟いた。

最近、このゲームではイベントの度に記念BOXなるものが売られるようになった。

中身はかつてプレイヤーが多大な労力を払って入手したレアモノ

の武器たちだ。それが、ハズレアイテム数十種類と共にランダムで出現する仕組みになっている。

今回の釣りイベントならば、黄金の魚を釣り上げてNPCに引き渡すとラッキーコインという金貨一枚と交換してもらえる。そのコインとリアルマネー100円で、BOXを一つ買う事が出来るといった具合だ。ユーザーの掲示板では、現在、廃人プレイヤーの怨嗟の声も生々しい。

このBOXが出るまで、そのレア武器は本当に一握りの……一つのサーバーに一つしかない、というレベルに極少数の激レアアイテムだったのだから。

出現確率は非常に低い。誰か暇なユーザーが調べていたが、千人に一人が持つ程度の数という話だった。だが、サーバーに一人から千人に一人では雲泥の差だ。最初こそ、運営の暴挙と騒がれもしたが、現状では皆慣れてしまい、そんなものと諦めて受け止めている。

そもそもサーバーに一人だけなどという無双プレイヤーの存在が消えてなくなる方が数倍小気味良いという声もある。無双プレイヤーたちはまた、彼らなりの理論で次の激レアアイテム入手に必死になった。

古いアイテムは次から次へと無価値に叩き落される、そうして新しいアイテムも次から次へと投入され、廃人たちは奴隷の如くにせつせとINせざるを得ない状況へと追い込まれていった。

人の、目立ちたい、コンプしたい欲求を巧みに突ついて刺激する。『憧れのあの武器が、たったの100円で手に入るかも知れない……』

巧い商売だ。そう思いつつ、冬夜もついつい課金チケットに手を出してしまっていた。

レアアイテムはやっぱり欲しい。

始めたばかりの初心者には、千人に一人が所有しているモノだろうがレアはレアだ。

例のギルドから思いもよらぬ誘いがあつたおかげで、夢が広がった。

たぶん、アキラは良い顔をしないだろう。それが当面の問題。

ギルドの噂を拾うのは簡単だった。過去に掲示板で暴れているから、その当時の記録もついでで読み返しておく。ギルマスは穩当な人物だが、反してサブマスは喧嘩っ早いとか、No.3が実はあの時の男エルフだったこと、エルフの癖に即死クラスの攻撃魔法が得意でチーム戦では前衛であること、など。

「エルフって普通は後衛でサポート職だろ、色々メチャクチャだな、このギルド。」

いや、よく見ればメンバーが揃いも揃って超攻撃型のプレイヤーたちで、サポート専門の者は居ないようだった。冬夜のステイタス・カードを見て目の色を変えた理由がわかった気がした。

トウヤは、アキラとのコンビネーションを重視して、サポートキヤラに育てている。サポートキヤラは地味な役回りだ、育てているプレイヤーも、従って数が少ない。

ギルドには階級制度が作られている。ギルマスを頂点に、貢献度によって分けられている。その階級名も自分たちで勝手に付けることが出来た。

普通は、軍曹だとか少将だとか、ギルド員の趣味が丸解かりな階級名が付いていたりするが、このギルドではこうだ。『駆け出しの凡人』『普通の凡人』『残念な凡人』『色々アレな凡人』『超人的な凡人』

読むなり冬夜は脱力した。

いせんまんじーるど

プレイヤーの掲示板は、いつでも、ほぼチャットルーム状態だ。例のギルドの板を覗いて、冬夜はぎよっとする。アキラがINしていた。

チャットは穏やかに進んでおり、アキラはギルドメンバーと和気藹々と話をしている様子だ。どうやら、アキラはアキラなりに気を使ってくれていたようで、嬉しく思う。

これなら問題なくイベント参加のためのギルド加入に持ち込めそうだ、とも。

チャットメンバーは3、4人は居そうな気配がする。

「BOX買うの？ 止めた方がいいよー。ウィルスナはPKゲームだから、初心者がレアなんか出した日にゃ、狩人が群がってくるよー。」

最後尾にあったレスを読むなり、冬夜は机の上につつぶす。冬夜の夢が五分で潰えた。

そりゃそうだよなあ、と苦笑を浮かべる。確かにあそこはそういう場所なのだ。良くても銀行に預けっぱなしがオチだろう。大手を振って持ち歩けるレベルに達した頃には、ゴミ同然の価値かも知れない。

運営が発作のように度々暴挙に出るお陰で、アイテムの価値は流動的だ。

昨日の掲示板には、大量の在庫を抱えたプレイヤーが今回のイベントで価値が暴落したために売れなくなった、と泣きを入れている記事もあった。運悪く、イベントのハズレアイテムがダブったのだ。プレイヤー達を釣るためのアイテムだから、それぞれはハズレと言えども価値はある。普通に、取引版などで纏め売りがなされているアイテムの名が、ちらほらと出ていたのを思い出した。

イベント賞品アイテム一覧表。

冬夜はチャットに加わることなく、じつとメンバーのやり取りを見ていた。こういうものはタイミングがあり、逸してしまったのだ。チャットでのアキラは普段よりお喋りだと感じる。まるで女の子のようで、ちよつと期待が膨らんだりもする。冬夜は未だにアキラの性別を知らないままだから、あれこれ推測するばかりなのだ。

聞けばいいのかも知れないが、なんとなく、聞き辛い。

アキラの口調は掲示板の上でも、とても中性的だった。

「もし出たら、売っちゃおうかなーとか思ってるんだけど。ほら、初心者の中には必要ないアイテムばかりだし、中堅以上のプレイヤーが買ってくれるんじゃないかなーって。」

抜け目がない。レス主はアキラだが、冬夜では思いつかない事を提案している。アイテムの転売は禁止されてはいない。ただし、PK許可のゲームで大金を積むというのは無謀にも等しい話だったのだ。取引はさほど活発ではないのだ。買わねばならないアイテムは、すなわち、身の丈に合わせぬアイテムだから、他人に奪われる。

取引版で常連になるという事は、影では狩人たちのいい得意先と呼ばれる事だ。

アキラの提案に乗る者は、割とすぐに出てきた。冬夜の予想では、このギルドのメンバーは興味を示さないだろうと思っていたのだが。「じゃー、激レアが出たら俺が買うよ。幾ら？」

サブマスのレス。激レアとは、例の、暴落アイテムだ。

「50Mは欲しいなー。」

「たかつ！」

暴利だ、50Mと言えば5千万Gのこと。高レベルのプレイヤーがダンジョンを一周しても稼げる金額は2000Gそこそこのながら、どれほどの大金か。

「50Mかー……、うーん。痛いけど、もし出たら取っというー。なんとか都合するしー。」

どうやらサブマスはあの剣に御執心らしい。

「俺、入手するためなら片っ端からPKする覚悟だからー。」

怖すぎる覚悟だ。冬夜はパソコンを前に嘔き出してしまっていたが。

もし、50Mという相場が付いているとしたら、そのアイテムはまず銀行から出てくることなどないだろう。それでも持ち歩くプレイヤーが居たなら、それは恐らく、彼ら同様のカンスト様たちだ。ちよつとおぞましい想像を巡らせてしまい、冬夜は身震いした。カンスト同士のガチバトル……。

そんなもの、決着が着くはずなどない。HP/MPともに桁外れの連中なのだから。

「たつくん、それ手に入れたらアンタならどーするよー？」

ロリウィッチのレス。

たつくん、というのはサブマスのキャラネームだ。はた迷惑なネーミングセンスのせいで、新人はみな「たつくんさん、」と呼んでは首を捻っている。

「見せびらかす！ 銀行の前でだけ！」

自信満々のレスが返された。

銀行は街の中にあり、街の中はPK禁止の安全地帯だ。

フィールドに持って出れば、まずPKを仕掛けられるのは間違いない。普通、カンストクラスの廃人たちはよほどの事がなければPKなど仕掛けはしないものだが、今回はその、『余程の事』に相当する。

「一日中、銀行の前に立つてるから、暇なら話しかけに来てねー。」
文面からしてご機嫌なたつくんさんのレス。もう入手したつもりになっている。

そこへギルマスが割って入ってレスした。

「使えもしねーアイテム買ってどーすんのー。けどまあ、俺等はま

ずコイン入手が問題なんだけどなっ。」

意味深な書き込みに、冬夜は首をかしげた。

イベント用コインは譲渡不能アイテムだ。それが、何かあるんだろうか？

話そのまま、世間話へと移ってゆき、そして冬夜は話題に乗り損ねた。

もし、激レアであるあの剣が出たら……所持と一攫千金、どちらがお得だろう？

やっぱり夢が広がった。少々、最初よりは卑屈なカタチだが。

けいぞくはちから

実際、50Mが大金かというと、実はそうでもない。

ゲームは常にインフレ状態で、通貨はクズ同然である。

初心者は稼ぐにも大変な思いをしなければならぬが、彼らほどの廃人となれば、その程度の金額ならひと月待たずに稼ぎ出すだろう。

ダンジョン周回にかかる時間効率を極端に上げるだけでいいのだから。

たつくんが苦言を呈していたのは、単に労働が面倒くさいからに他ならない。Gを稼ぐためだけにダンジョンに潜るという事は、彼らには苦痛なのだ。

レベルカンスト、スキル精度マックス、更にそこそこの蓄えがある連中は、もはや井戸端会議の為にだけにしかINして来ない。あるいは、新人の助っ人が生きがい、という者もかなり居る。

このゲームにおける廃人たちは、多くが隠居老人に近かった。コンプ癖を刺激されて居座っているだけだ。

運営の仕掛ける季節ごとのイベントには恐ろしく食いつきが良かったが。

ダンジョンは通常、徒歩移動のみで、歩かねばならない。

だが、ゲーム運営も年数が過ぎれば色々と便利なアイテムがリアルマネーで売りに出されてくる。

このゲーム内では、『光速移動スキル』という名目で登場した。これを目覚めさせる為の特別イベントが課金チケットになっていた。100円。

このゲームのスキルは好きなものが選べたが、すべてイベントを経なければならぬ。……オール100円。組み換えが利くため、ほとんどのプレイヤーは何だかんだで全種類揃える。イベントムー

ビーもそれで見える方法がないのだ、プレイヤービーを撮れないようになっていた。

職業の選択も自由だが、職業ごとの専用スキルはそれぞれで50前後あり、全職業の全スキルを制覇すれば1000に近い数に上る。……一人頭の売り上げ期待値一万円也。

なにしろ、VRMMOがマーケットになり始めた頃に制定されたバーチャル規制法が痛いのだ。

痛覚は80%カット、対ショック状況に関するセーフティの設定義務、未成年に関する諸々の法遵守をシステムに導入はもちろん、依存抑止の為にバーチャル空間に留まることが許される時間はトータルで1日5時間と決められている。カウントの上で5時間に達した利用者はバーチャル機材のハードに組み込まれたシステムの方で強制ログアウトされる。

これを解除する違法プログラムの開発、使用で連日、逮捕者の二ユースが世間を賑わしてもいた。

罰則は、1年以下の懲役または30万円以下の罰金。……年々厳罰化を求める傾向にある。

このような環境でも生まれてくるカンスト廃人たち。

彼らの多くは、限られたIN時間を一切、他の場所では使わない連中だ。このゲーム一本に絞って、毎日5時間のノルマを一年以上続けてきた。まさしく、『継続は力』の典型。

現状はレベル400でカンスト、その四分の一のレベル100で聖騎士へと変化するチェンジスキルを入手する。その聖騎士の特殊スキルに、光速移動が実装されたのが半年前だった。

スキルの精度が上がれば、通常の倍速で移動が出来る。エンカウトも無視が可能だ。さらに効率を求めるなら、聖騎士になりたての中堅者を誘う方法もある。

中堅者もまた、スキルの精度上げのためにダンジョンを周りた
いものなのだ、楽が出来る上級者と共に。

変身時間は魔力の消費で換算される。剣士ならば長時間変身し
放しでいられた。

ダンジョンには数種類があり、イベント用はレベルに換算して強
敵がラスボスで降臨する設定だが、他のダンジョンはそれぞれにボ
スのランクが固定に近い状態で決定されている。

初心者卒業ですぐに向かうダンジョンならばキング・リザード、
次の場所ならレッドメタル・スケルトン六体、という具合に。

例えば冬夜はレベル13、同じゴーレムでもHPはせいぜい30
ほどのボスが出る。ところが、レベル20となれば、ゴーレムの
HPも600に増加する。

そのあたりのボーダーを調べるウィキサイトまであるくらいだ。
だが、そんなコトさえ、カンスト廃人たちには関係がない。イベ
ント用以外の全てのダンジョンが、カンストは規格外としてその下
を基準に設定しているからだ。

関門の鍵はダンジョンホールの四隅いずれかに在り。
湧き出る雑魚には目もくれず。

ダンジョン内を突っ走り。

ラスボスのみを瞬殺する。

宝箱からは纏まった金額と、運が良ければレアアイテム。

それらを惜しげもなく叩き売り。

そうして、高レベルプレイヤーという連中は報奨金で無双が出来
ていた。

ましてや、サブマスは魔道士だ。魔道士というものは、やたらと
高い魔力にものを云わせ、広範囲攻撃を得意とした為、湧き出る雑
魚さえ殲滅して小銭まで残さず回収してしまう。

まさしく強盗だ。
ハンデッド

あのぶっくりほっぺのちまい子供がダンジョン内皆殺しをやつてのける姿を想像して、冬夜は苦笑を浮かべる。まあ、どう考えても中身はいい大人に違いないのだ。自身でさえ、初心者用とは言え、ダンジョンへ潜れば殲滅を旨としている。人のことは言えないと思った。

サブマスの実力なら雑魚など一撃だろうから、ものの数分で一つのホールを抜けてしまう計算が成り立つ。半時間もあれば、ダンジョンボスに辿り着いてしまうだろう。

そうしてボスは変身すれば瞬殺だ。

聖騎士の特典は、それぞれの能力値+20%上乘せ。

カnst廃人にとっては、無双を楽しむためのスキルでしかない。

がーるずぶらんど

「トウヤは幾つ買う予定？」

ダンジョンの薄暗い石造りの廊下でアキラが問いかける。

VRMMO、バーチャルリアリティが売りになっているのだから、肌を感じる質感はどこを取っても超リアルだ。街の建物、草原の草木、遠景の広がりなどはまるで本当の旅行者になった気分にさせてくれる。VRMMO参加者はメジャーなもの、マイナーなもの、すべて合わせて数億人規模と言われるが、現実にはそのリアルな景色や生活面の工夫から、旅行者気分で利用するユーザーも多く、彼らは多くのゲームで重複する上にゲームそのものをしない為プレイヤーとは見なされず、実質のゲームプレイヤーは全体でも一億に満たないと算出されていた。全世界で、一億未満。

ゲームキャラの枠は高価だ、それゆえ、多くのゲームにはお試しキャラ枠が用意されており、無料で提供される。その枠を利用してお手軽な異世界旅行を楽しむという遊びも流行っていた。

冬夜の母親などがそうだ、VRキャラを持っているがもっぱらネットショッピング街にしか行かない。

ゲームとコラボしたデザイナーズショップなどを冷やかす為にだけ、そのゲームの無料登録に加盟するのだ。ゲーム自体には興味が無いから。

ゲーム側はそういった冷やかしプレイヤーでも、動員数には計上出来るので文句はない。

無料キャラはプレイヤー数に計上されつつ、実際には費用を運営会社が負担するため使い回しだ。期間限定のお試しという形態が一般的だった。

また、未成年売春の問題も深刻だ。ネットショップ街もVRMMOも、出会い系としての側面はいかんともし難く、会合してリアル

で会うという方法が取られるため、常に警察のログ監視が行われてもいた。

レアアイテムを餌にリアルで会おうという輩がとても多いのだ。日に日に手口は巧妙になり、イタチゴッコと化していて警察も手を焼いている。

晶はアイテム類にはほぼ興味を持たなかった。それが、このカタベントツク湖狂走曲の間に、徐々に心境の変化が現れ始めていた。

誰もが熱狂的になる事柄に、顔を背け続けることは難しい。

バーチャルネットゲームは元々が高価な市場、そこに集まる客層もまた、それに見合った富裕層が大部分を占めるのだから、動く金額の上限はあつてないようなもの。今では一大市場にまで成長しており、政治的にも迂闊に手出しが出来ない状況に近付きつつあった。ビジネスとして成功したカルチャーは、多少の弊害では潰されない。倫理より金が優先されるのだ。

「50Mか……。そんだけあつたら、ミーネのあの服が買えるんだよねー。」

ミーネという名詞に冬夜は聞き覚えがない。

コラボ衣装にはまったく興味のない冬夜が知らないのも無理はないが、その名は有名なブランドのものだった。女子高生に大人気のガールズブランド。

ただ、そのセリフを聞いた時に、ふと、なんとも言えない不安がよぎった。

奇妙に感じながら、返事を返す。

「50Mなんて、俺らのレベルじゃまっとうに稼ぎ出すのは不可能な金額だもんな。」

冬夜の予定は最初3個だった。ある目的が出来て現在は10個買おうと考えている。ギルドのメンバーたちには止められたけれど、転売目的の投資と考えればさほど危険な買い物ではないと思えた。

金が欲しいわけではない。

生産職の存在しないこのゲームでは、プレイヤーが金をつぎ込むのは装備だけだ。

レアなアイテムやリアルで高価なアイテムなどは、リアルで金持ちか廃人たちのステータスという以上の価値はないが、その下の、スキルや能力値に関連したアイテムは皆が欲しがるのだ。

価値観は人それぞれ。冬夜は装備を揃えて強さを誇示するよりも腕を見せつける事の方を好んだ。だから初期服同然のツナギを着て、ノーマルな武器を携えている。

冬夜のようなプレイスタイルの者が多いのも、このゲームの特徴だった。

アイテムのリリース速度もさることながら、敵の強化も半端ない。次々と廃人向けの新しいダンジョンがリリースされ、背中を追う後続プレイヤーを引き離していく。

古いダンジョンの丸々コピー、しかし、中のモンスターは色彩と防御力と攻撃力が違う、という風に。

強い装備はそういった上級のダンジョンをクリアする事が装備条件になっている、冬夜にはまだまだ用がなく、冬夜のプレイヤーに金は掛からない。

欲しいモノは、冬夜のプレイキャラの為のモノではない。

アキラがメイド服以外の服を着ている姿を見たかった。

ミーネとかいうブランドの服がどんなデザインなのかは知らないが、この、メイド服にバケツ兜というスタイルを貫くことはないだろう。欲しがっていた可愛い服にわざわざバケツを被るほどバケツが好きなら諦めよう。

なんでバケツなんだろう、これ見よがしの溜息に気付いたアキラがこちらを見る。

「腐るな、腐るな、すぐレベル上がるよ。」

「そうじゃねえよ、馬鹿。」

アキラは勘違いして、バケツを揺らして笑う。

二人は実際に、フライングの効果が最大限に活かされるようなゲーム生活を送ってはいる。廃人に近いギルドメンバーに追いつくのは不可能としても、のんびりしている新人たちと比べれば、二人とも急ピッチにレベルを上げていた。

廃人が仲間というのは強さへの近道だ。

自分のレベルではクリアが困難と思われるダンジョンを敢えて選んで、廃人プレイヤーに同行を頼めば、自身は無人と化したダンジョンホールを抜けていくだけでクリアボーナスを入手出来る。

あるいはボス戦で瀕死にまで追い込んでから、遠距離攻撃の一発を当てるだけで、自分が倒したことになる。この際の経験値が大きいのだ。

時間をかけて全部のエネミーを倒して手にする経験値よりも、無双状態の廃人に同行してもらって何度もボス経験値を稼いだほうが、報酬面を含めて利が大きかった。

まいていっつ。

現状、二人はサブマスと共にダンジョンへ潜っている。

サブマスのたつくんは下心があるため、二人には協力を惜しまない。それだけ、どうしても手に入れたいのだろう、大当たりのレアアイテムを。

冬夜の調べたところでは、例のアイテムの予約取引は現在60Mほどに値上がりしていた。取引掲示板に提示されている、欲しがっているプレイヤーが提示している金額の平均だ。

差額の10Mをはるかに超える恩恵を受けている二人にしてみれば、今さら文句を付けるつもりもない。

アタリが出たら、素直に渡してやろうと考えている。

しん、と静まり返ったダンジョンホールをまた一つ抜けた。

彼らの手間は、三階層あるダンジョンをマラソンし、放置された宝箱を回収する労力だけだ。

廃人クラスとなれば、こんな下級ダンジョンの宝などゴミなのだろう。

「お、割と早かったね。あと、アイツに一撃入れたら死ぬけど、どっちが獲る？」

ラストのボス部屋の前で、たつくんがくつろいでいた。

ボスは部屋から出ることが出来ないのだ。手下も居なくなっていて、ボスのゴーレムが一体だけでウロウロと部屋の中を歩いていた。敵の体力を示すゲージはほぼ真っ黒。残りHPはおそらく10もない。

計算して、それだけを器用に残しておいたのだ。こういう事が出来るのも、何万回とボス戦をクリアしてきている廃人の成せる業と言えた。

「器用ですねえ、毎回きつちり10だけ残してる。」

冬夜はサポートスキルのエキスパートを目指している、敵のHPを正確に数字で読み取るスキルを使っていた。

「そりゃー、このゲームやって長いからねー。ゴーレムの基礎体力がナンボで、どの攻撃をどれだけ当てりゃ、どれだけ減ってっつのは、計算出来るでしょー。」

シヨタな廃人がへらへらと笑いながらそう言った。

そんなのー々計算しながら戦闘なんて出来ねーよ、と冬夜は苦笑する。

高速移動が出来るサブマスの速度なら、このダンジョンが20分で一周、移動スキルのない冬夜たちは30分かかる。サブマスはエネミーを掃除しながら、冬夜たちはただのマラソン、でこの差だ。

魔法使いの彼にかかれば、部屋全体を攻撃する殲滅魔法の一撃で雑魚部屋など即座に片付く。魔法回復薬のガブ飲みを併用しての無双。

現在3周目、あと30分で解散の時刻だった為、巻いている。

巻く、とは攻略スピードを上げること、つまり、こまけえことはいいんだよ、という意味だ。

ほぼチート無双状態だった。

「ねー、ギルマスとかサブマスとかって、リアルは何してる人なの？」

いきなりのタイミングでアキラが無遠慮な質問を投げかけた。

「うわー、デリカシーねえー。冬夜は思うが、一々、口にしたりはしない。冬夜自身、興味が無いわけでもないから、さりげなく聞き耳をたてている。」

「俺は普通に会社員だよ。このゲームは娘がやってるんだー、ほんとは。最近は全然INしないから、代わりに父が代行してマス。」

「えー!? それって、いいの?」

「キャラ枠って高いんだからさ、こんなの普通だよ。普通。ギルマスは夫婦で一人のキャラ使ってる。」

レオさんね。昼間に会うとオネエになってるから、面白いよ。」
365日、24時間稼働中、というキャラも他タイトルには存在するのだという話だった。

「レオさんとか、言っちゃ悪いけど引き籠りのゲーマーかなんかだと思ってた。」

「ずけずけと遠慮のない言葉がアキラの口からは飛び出してくる。」

「人気の新作タイトルなら解かるけど、ここじゃそんなプレイヤーは少ないんじゃないかなー。」

割と簡単にレベル上がるから、廃人には不人気だよ、ここ。 R
MTも出来ないし。厨坊多いし。」

「あはは。」

とりあえず二人は笑っておく。まさしく自分たちが厨坊だ。

このゲームでは、クリアするために武器を選ぶというような事はないが、タイトルによつては、恐ろしく性能が変わるような武器防具が存在したりする。そういった武具は公式チートと呼ばれ、冬夜のようなガチ派プレイヤーには人気がない。

高価な上に希少価値も高いそれらのアイテムを喜ぶ層との反目も凄まじい。

魅せるプレイなどまるで出来ないくせに、一撃の大きさのせいで、高確率でトドメを攫っていく。

オイシイところだけ、持っていく。

……嫌われる所以、だ。

だが、希少なアイテムを、努力を重ね、時間と費用を費やして、ようやくの事でゲットする、そういう裏側の並々ならぬ努力は敬意を払うに足る。従って、本当に嫌われるのは、違法な行為で力をする輩だけだった。RMTによる不正な金で買い取るだの、チートツールで横着をしてレベルを上げるだの。

アイテム入手に関しては、不正で得たものと努力で得たもののとの区別が付けにくい。そのために、努力でこれを手にしようという層

からも、嫌われるのだ。チート遣いは。

『お前らのせいで、俺らまでがチートの疑いを掛けられるんだ、氏ねよクズが。』

掲示板で論争が起きると、決まって、こんなセリフが幕引きの合図となる。

人間は、自分の属する集団が一番大きいと錯覚する。
不正をする者たちは、それが普通だと思いがちだった。

まいていこう。(後書き)

RMTリアルマネートレード

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8207u/>

いつかは、羽ばたけるものだと、信じていた。

2011年11月24日15時54分発行